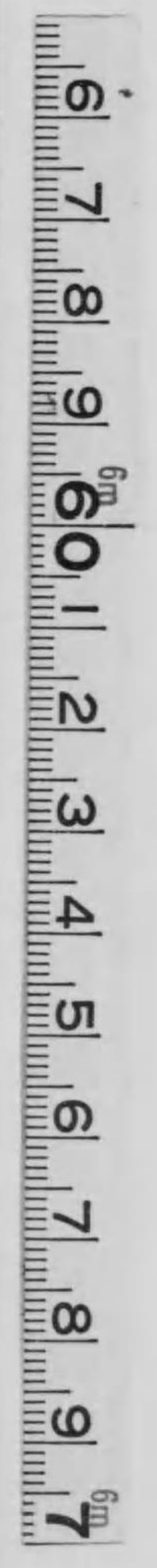


276
389



始





日本體育會
 體操學校主事
 手島儀太郎校閱
 日本體育會
 體操學校教授
 宮原義見著

現代體育教授法精義

東京麴町區麴町四丁目廿一

教文社發行
 電話四谷七〇一九

大正
 15. 8. 17
 丙寅

276-389

自序

健全なる身體に健全なる精神宿ると言ふコメニユウスの言は文化の進展と共に益々その必要を認むるものである健全は成功の母である健康なる人間に人生の眞の悦樂はある文明は人類の努力的發展自然界の征服である之には人類の最高の奮闘を必要とする鋭敏な神経系統の活動はこの征服に必須な武器である西哲ルツソー曰く「身體弱ければ弱い程身體に服従され強ければ強い程身體を服従す」健康は文化の進展にも個人としてはその人格完成にも最重要な條件である而して近時の體育上吾人の最も反省を要することは肉のみの向上に没頭し肉を通した人格の確立に努力せざる點で

自序

健康の進歩

健康の進歩

健康の進歩

ある余は肉を通した精神の訓練肉を通した人格の教養之が
 體育の國家的生命と思ふのである今や體育は民衆化されつ
 ちある明治時代に於ける體育の教材は體操教練の數種に過
 ぎなかつたが現時の體育教材は種々雑多である或は本能に
 立脚せる競技あり審美的の教材あり創作あり枚擧にいさま
 ない實際之が適用に苦心の状態である實際現代體育の重要
 な問題は多々あらんもかくの如き教材を如何に適用すべき
 かが緊急問題と信ずるものである而して之を適用するにせ
 よかかる教材あるが故に之を課すと言ふことは不見識であ
 る余は從來體育法が無味乾燥にして心理的効果を發揚する
 上に於て一大缺陷の存することを經驗した
 而して從來の體育教授法にては持續力なきものであること

を知つた故に余は兒童の状態と雜多にして適用に苦しむ教
 材の關係を吟味し以て新たな體育教授法案出と言ふこと
 に着眼し恩師手島儀太郎先生の校閲を経て本教授法を刊行
 したのである薄學淺才の拙下に對し常に篤き御指導を賜り
 たる先生の御芳恩を深く銘記すること共に尙本書脱稿まで體
 操學校在學生町井昇君の御援助を得たることを謝す

大正十五年初春

東京大井町寓居に於て

著者識

現代體育教授法精義目次

緒論

一……一四

第壹編 概論

第一章 體育の教材論

第一節 體育教材の分類

一……二

第二節 體育各教材の特質及缺陷

二……五二

第二章 從來體育科教授法の缺陷

第一節 心理的缺陷

五二……五六

第二節 現代體育教材と從來體育教授法の衝突

五六……六五

第三章 教法の理想

第一節 自發的活動に就て

六五……七七

第四章 教授法の一般的説明

第一節 從來教授法に關する意見の總括

七八……八一

第二節 教法の二方面

八一……九七

第三節 各教授法の特徴

九七……九八

第四節 各教法の一般的注意

九八……一〇三

第貳編 各論

後第一章 體育科教授法の形式

第一節 教授形式の意義

一……二

第二節 體育科教授形式の説明

二……二〇

後第二章 リズミカル中心教授法各論

第一節 前言

二二……二三

第二節 リズミカル教材中心教授法の形式的段階

二三……五四

第三節 リズミカル教材中心教授に關する

五四……六五

其他の注意

六五……七九

第四節 身體美に就て

七九……八五

後第三章 競技中心教授法各論

第一節 競技中心教授法の使命

八〇……八五

目次

第二節	競技の概念	五……八八
第三節	競技指導に於ける四大着眼點	八八……九四
第四節	競技教材の選擇	九五……一二三
第五節	教材の配當について	一二三……一二七
第六節	正課時と課外指導	一二七……一三五
第七節	教授の實際	一三五……一八五

後第四章 體操中心教授法各論

第一節	體操の一般	一八六……二〇〇
第二節	器具體操に關する注意	二〇一……二〇八
第三節	體操實施上の主眼點	二〇八……二三七
第四節	排列に關する注意	二三七……二四五
第五節	整頓	二四五……二四九
第六節	姿勢	二四九……二五四
第七節	着眼に就て	二五四……二五八
第八節	合同體操に關する注意	二五八……二六三
第九節	呼唱に就て	二六三……二六九

第十節 號令に就て

二七〇……三〇四

後第五章 本教授法の適用

第一節	前言	三〇五……三〇六
第二節	發達の階程	三〇六……三一一
第三節	發達階程に關する諸說	三一一……三二三
第四節	發達階程に關する一般概念	三二四……三三一

後第六章 學年と教授法

第一節	尋常一年の教授	三三二……三三七
第二節	九歳十歳頃の狀態及體育	三三七……三三四
第三節	十一歳より十二歳頃の狀態四年及五年	三三四……三三八

第四節 十三、十四、十五歳頃の體育

三三九……三四八

第五節 中等學校體育

三四八……三五八

後第七章 體育科の教授案

三五九……三六八

雜件

三六八……三六八

第一節 器械使用及運動練習に関する心理的考察	一……三
第二節 疲労に就て	三……一六
第三節 運動會に関する研究	一六……二八

緒論

(二頁—十四頁)

緒論

● 體育の意義とその尊重

體育とは知育、徳育、美育などと共に人間教育の四大要件の一であつて、即ち身體の健康増進及びその均齊的向上を計る爲めに行ふ、人爲的、具案的であり、ある秩序と型式を有する教育的動作を稱するのである。進んでは眞善美の最高觀念を具象化すべき身體の修養及訓練である。換言すれば、單なる身體の無意識的運動を意味するのでなく、それは意識せる目的を以て爲す一の技術であり又合理的なる方法である、抑々吾々人間の生活が存する限り體育は永久的に人間生活の必須要件であらねばならない、生活に對する尊重は即體育に對する希求を生じなければ、知育、徳育、美育が人間生活に必要であり、尊重さるべきと齊しく體育の價值も勿論容認さるべきである。

● 體育の進化

さて體育が身體の運動を以て基礎とさるべきは云ふまでもなく、即ち體育より

身體の運動をとればそこには何物も存しない。然し乍ら身體の運動の凡てを體育と稱するかと云ふに嚴密に考察する迄もなく、體育の二字に對する吾々の觀念に對して、そこには一の定義が起り來るのを感じる、之れ冒頭に於て述べた如く體育には體育の條件が存在するのである。然らばかゝる意味に於て體育は人間の原始生活以來存在したかと云ふにそれはそうでない、即ち原始生活時代にあつても——吾人の推定に依れば——本能的運動即ち呼吸をする、欠伸をする、手を揚げる、背を伸ばす、叫ぶ等々の自然的に起る動作のあつた事は疑ひもない事である、又一面に於て生活上の必要の爲めに食を求めて木に攀ぢ、又山野を馳せまわりなどした單純なる運動があつた事も想像される。即ち原始時代に於ては生活即運動即體育であつて吾々の今日稱する體育の意味とは餘程觀念及形式に於て相異したものであつたのである。それが遊牧時代を経て簡單な器具の考案となり、所謂農業時代となり、彼等は土地を耕す事を知り、又魚類を捕る方法を考究し、禽獸を捕る事を覚え、即ち投石投槍等彼等の運動も次第に複雑なる方法に及むた事が知り得るのである、換言すればその自然的動作より、漸く智的動作に移つて來たのであ

る。團體生活の各所に生ずるに至り、その生存競争の爲めに次第に對敵關係を生じ、武術の進歩となり、それは愈々智化され目的化され組織化されたのである、然しそれは對敵を豫想して爲されたる行爲で、今日の體育の意味はないがこの武術が體育の發達を促した事は云ふ迄もない、斷片的ではあるが、之れ體育進化の概略である。特に茲に考慮すべきは、所謂近代文明に於ける機械の發明となり、生活の分業化すると共に、生活の都市集注は愈々激しく、文明的生存競争は日に日に壓迫的となり、各人の日常生活は非自然的となり拘束的となつて來た、即運動即生活即體育であつた原始時代とは遙るかに相異した形式に於て吾人の日常生活は實現されて來たのである、即吾人の體育に對する觀念及び實際は一定の形式を供へ日常生活と分離した動作となつたのである。それは生活に對する直接的實用的動作でなく、間接的な作用と目的を有する秩序的なものである。

然してこの體育は積極消極の兩方面を有してゐる、積極的體育は體操、教練、競技、遊戯其他等の身體的直接活動を意味し、消極的體育とは養生衛生設備等の間接的靜的行爲を意味するのであり、この消極積極的の二方面何れも輕視することの出來

ない體育の主要件であるが、消極的方面のやゝもすれば學校體育科に於て忘れられるのは遺憾な事である。

●體育科の任務

古代ギリシヤに於ける體育科の任務は、身體の健康或は身體の發育と云ふことを主とし、他の一つは、其れに依つて立派なる身體を作り上げると云ふことであつた。

即ち彼等の最も熱中したところのものは、身體の發育健康の増進と云ふことよりも身體の美的教育を主としたのである。その後中世紀に衰へたギリシヤ體育は、十八世紀になつて汎愛學派が起る様になつてから復活したのである、其後グーツムーツはシネペンタールと云ふ所に體育場を起し千七百九十三年(幼年者の體操)と云ふ本を著したが、之が體操に關する最初の著書である。

其後十九世紀に入つて、ヤーンが體育を盛んにし、體操を學校教科目に入れることを主張したのであるが、之は身體の美とか、身體を發育せしめる様な目的で主張したのではなく、獨逸國運を回復すると云ふ國家的背景の元にかく主張したので

ある。

かくの如き目的を有する體育科が、純粹に生理學上、衛生學上の考案から、被教育者の身體を健康にしなければならぬとの目的上より體操を組立てたのが、ロートスタインである。其後リング氏の研究にかゝるスエーデン式體操が歐洲各國に認められる様になつたのは、千九百五年白耳義のモンス市に開かれた萬國會議の頃からである。以上は世界に於ける體育の思想及び實際の發展、變遷の概略である、兎に角、體育科の任務を考へて見ると、かく時代により異なり、或る時は身體の發育に重きを置く時代あり、或は愛國心を養ひ國家の防備にあたる軍備的の任務を遂行する手段と見る見方もあり、身體の美の作出を其の任務とする時代もある。然し現代教育學者の意見は身體の發育と云ふことを學校體育科の任務とし、其他の訓練的、方面例へば規律的の習慣、或は秩序の習慣を養ふと云ふ様なことは此の主なる任務に附隨する任務と見てゐるのである、次に體育上特殊の立場にある教練につゝて考へるに

●學校教練の任務

一體この學校體育上に於ける教練と云ふものは、軍隊教育即ち國家を防衛すると云ふ特別な國民の教育との連絡である。さて軍隊教育、換言すれば兵力と云ふものは如何なる國家的の生命あるや、又軍事豫備教育に對する反對者の意見を考へ、吾々體育家は如何なる立場を以てかの軍事豫備教育に對すべきかを明らかにせねばならぬ。

凡そ國家といふものは、最高の社會的組織であつて、社會と云ふものに國家以上の組織はない、社會には必ず組織が必要であるが、人間が雜然として群つてゐても決して共同生活の理想を實現することは不可能なことで、人が會合して事をなさんとする時は、必ず組織を立て規則を作り役割を定めることが肝要である。各人が其の組織及規則を格守する時始めて其の共同的の仕事は順調に進展するものである。まして永續的な共同事業になると必ず其の組織を確立することが大切で學校には學校としての組織規則が必要であるし、家族の如き少數の人々でも組織規則が立つてゐれば、其の家族生活が幸福に又永遠に榮へて行くのである。然し之が社會生活の全部ではなく、又之等の組織と組織との關係を整へる組織がなけ

ればならぬ。

かくの如くして吾等の社會を総合的に組織してゐるものは即ち國家である。人類の文化生活は社會の中に進展するもので、其の社會最高の組織が國家と云ふことを知れば國家の重要な意義を知ることが出来るであらふ。

人類の社會組織を今日の國家に迄發展せしめたことは、人類幾萬年の進化の結果でこの國家組織を進展せしめることは吾々の理想生活の實現となるものである。人格の自由も創造も國家の中に最高の組織的發展をなすものである。世界の平和も人類の文化も國家と國家とが關係して作つてゐる國際社會に於て創造せらるゝのであつて、世界と云ふ内容から國家組織を除き去つたならば空虚なものとなつて終ふ。又人格生活と國民生活を引き離して國家の外に生命ある人格の存在があると考ふことは、謬見である。空虚な個人、社會主義と云ふ様な思想が流れるのは、かゝる點の自覺が不充分であるからである。

かく考ふると吾人の理想は國家を離れて實現さるべきものではない、一體吾々の本性として其の内面には絶えず、或る要求が自發しつゝあるもので、其の要求の

方向に自我の生活を開展して行くもので、之等の要求を満足して行くことが価値の創造である。この価値を創造して行くことは意義ある人生であるが、其の要求を利那的の一部分のものとせず、自我全體の要求として充すことを目的とする時、其の目的を理想と云ふので、換言すれば理想とは最高価値を有する目的であつて、理想を實現して行くことは最高価値を創造することになる。個人が盛んになることは、この理想に近づくことでこの理想に遠ざかれば個人の衰へることである。個人に理想あるが如く、國家にも一つの理想があるが、其の理想は自主と統一と存続とを完し、國民全生活を組織的に進展せしめることであらふ。この理想に近づくのが國家の隆盛である、この國家の隆盛と云ふことが個人の理想實現世界の平和の源である。故に國家は其の自主統一、存続を完ふせんが爲めに富國強兵の實を擧げねばならぬ。即ち國家の理想實現に反するものには武力が必要であらふ。

然し武力の内容には徳を有することが大切である、國家がその國家の理想實現に反するものに對する武力はこれ正義の戦であつて、個人的より見れば個人の幸

福を守り世界的に考ふれば、世界人類の幸福を計ることになる。國家を軍隊的に訓練し國家防衛の爲に力を傾注することが直ちに侵略主義軍國主義とはならぬ。只之を利用する所の徳の如何にあるのである。これを要するに武の内面には必ず徳の存在することを忘れてはならぬ。

この徳を忘ることが、國家としては其の國家を滅し、世界に考ふれば世界人類の幸福を損傷する所以であることは、彼の歐洲戦亂に於ける獨逸の状態等より想像することが出来るであらふ。かくの如き重要な軍隊教育の豫備として學校體育上軍隊教育を實施することに付ては異議はなかるべきものである。

又單に體育上より教練の価値を批判して見るとすれば、そもそも體育科は肉體の向上を主とするものであるが、如何に肉體を向上したといえども、此の肉體を統一する健確なる精神と云ふものがなかつたならば、その肝要な中心を失ふことになる、その健確なる精神を養成するといふ點に於て教練の価値は充分認められるのである。

國民思想と體育問題

翻つて我が國現代の國民精神方面を顧みる時、果して剛健なる大和民族としての光輝を持続しつゝあるであらうか、健確なる大精神は満ちてゐるであらうか、動もすれば外國文明に沈溺し、無批判無自覺なる外國思想の輸入は輕薄なる流行となり、浮華放縱は時代精神を風靡せんとしてゐるではないか、吾々教育家は、かゝる國民の缺陷を善導して我が光輝ある大和民族の歴史を傷けぬ様に努力せねばならぬ。

かゝる軟弱なる精神の所有者となる最大原因は、各個人の意志の薄弱を證明するものであるから、教育者は須らく凡百の機會を捕へて、如何なる困難誘惑にも屈せざる精神の教養に注意せねばならぬ。

前述の通り意志の修練には精神方面の修練も大切であるが、肉を通した積極的の意志の訓練も至つて緊要なものであるから、體育指導者は、只單に身體の發育と云ふことにのみ着眼することなく、肉を通した人格の教養、肉を徹した積極的意志の訓練も亦其れ以上に必要なることを感銘せねばならぬ。

●學校體育科の社會的任務

吾々は、體育の民衆化と云ふことをしばしば耳にするが、果たして現今の體育が民衆化されつゝあるであらうか、其の施設、經營及び精神的自覺の程度に於ても甚だ物足りない感がする、これ元より國家經濟にも關係してゐることであらう、義務教育の延長にさへ多大の經費を要する時代に於て、かゝる體育方面の施設、經營にまで傾注されることは、其の要求の大なるを知る。

然し吾々は、民衆體育の不徹底が經濟上の理由を有するのみと思考することは出來ぬ、教育者は、すべて自己の思慮ある指導と奮闘で、この經濟的缺陷を補ふに餘りあることを自覺せねばならぬ。

我が國教育の程度は、中等教育を受けるもの百三十五人に對する一人の割合にして、米國の七十人に對する一人に比すれば、遙に下位たるもので國民の大多數は、義務教育を終へ直ちに實際生活に従事してゐる。故に學校體育の徹底のみは體育の向上とはならない。他迄體育は、普遍的一般的であつて、學校體育の熱は、遠く校門を出てで廣く社會民衆の上に及ばなければならぬ。

比較的大なる面積を有する學校體育場の如きは、只學生兒童の活動の地たるの

みにては餘りに平凡である。無自覺な國民の一般體育を改善するの動力は、指導者の熱誠と發動的活躍に待つ所が多い。

之が爲め、教育者が此の徹底の具體的法案を忠實に研究し、一日も早く之が實績を擧ぐることに努力する事が緊要である。

青年體育を以て體育の民衆化とし、民衆體育の教材を競技のみと思考するは、未だ體育の民衆化と云ふことに無理解なものである。

●體育の民衆化と社會風教との關係

民衆體育を實あるものとするには、彼等の趣味をして體育的ならしむることが大切である。之は教育上自學自習を被教育者に要求するのと同意味で、其の理想は民衆が體育を自覺して趣味的となる迄指導し透徹せしむることである。

趣味と云ふことを學理的に説明することは困難であるが、概して趣味とは人生の閑暇に生ずるものにして、各人の個性に基いた動作である。各人の趣味の高下は、其の人の人格の如何を示し、國民の趣味の高下は、一國文化の程度を測定するの尺度となるものである。それ若き男女等は、國民活動の源泉であつて、人生に於ても

最も向上的性能を有すると共に、又一面に於ては人生の危期と云はねばならぬ。

彼等は日々、遂行すべき業務を持つてゐる。又閑暇をもつてゐる。その本能的慾求の旺盛なる彼等の閑暇を、最も人間らしく、最も有意義に充實させることは至難の問題で、其の善導如何は、直接社會風教を左右するものである。

民衆體育の徹底は、只國民の體質を改善すると云ふことのみならず社會道德改善の一大使命を有するものと云つてよいのである。

●青年と體育

教育作用が其の根本的事實を闡明しないと、其の効果を收めない様に、すべて人間を人間に迄作り上げるには、彼等を構成する精神肉體の状態を知るの必要がある。

之の二つの方面を悉知して、合理的に又教育的に彼等を指導することが必要である。青年は國民活動の主幹中の主幹で、體育をして民衆化するの最初のスタートは青年の體育である。恰かもよし青年は、自然的活動的に運動を好愛する性向を持つてゐる。この有意義なる性向を以て、惡なる彼等の慾求を美化することが大

切である。

この活動的自然性及び悪なる慾求の美化と云ふことが、青年の體育指導者の着眼すべき又利用すべき唯一の點である。

これひいては社會風教をして健實ならしめる唯一の原因であらう。

青年の自然的活動性を適當に指導し、且つ體育の必要を自覺せしめたならば、其の自覺は延て一般國民をして識らすくの間、體育的人たらしめ、國民一般の體育の向上を見るに至るであらう。

青年獨特の競技會の如きは、只彼等の體育のみにあらず、一般民衆に一つの體育的刺戟を與へ、民衆體育と云ふ重大にして意義ある仕事の華々しき出發點と云はねばならぬ。

しかして吾々は考ふるに、この民衆體育の中堅となるものは學校體育で、學校體育は民衆體育の模範とならねばならぬ。而して又彼等の中堅となつて指導せねばならぬ。學校體育科の任務は、只單に學校兒童の身體的向上を計ると云ふ任務の外に、今述べた様な重大なる任務の存在することを自覺せねばならぬ。

第一編 概論

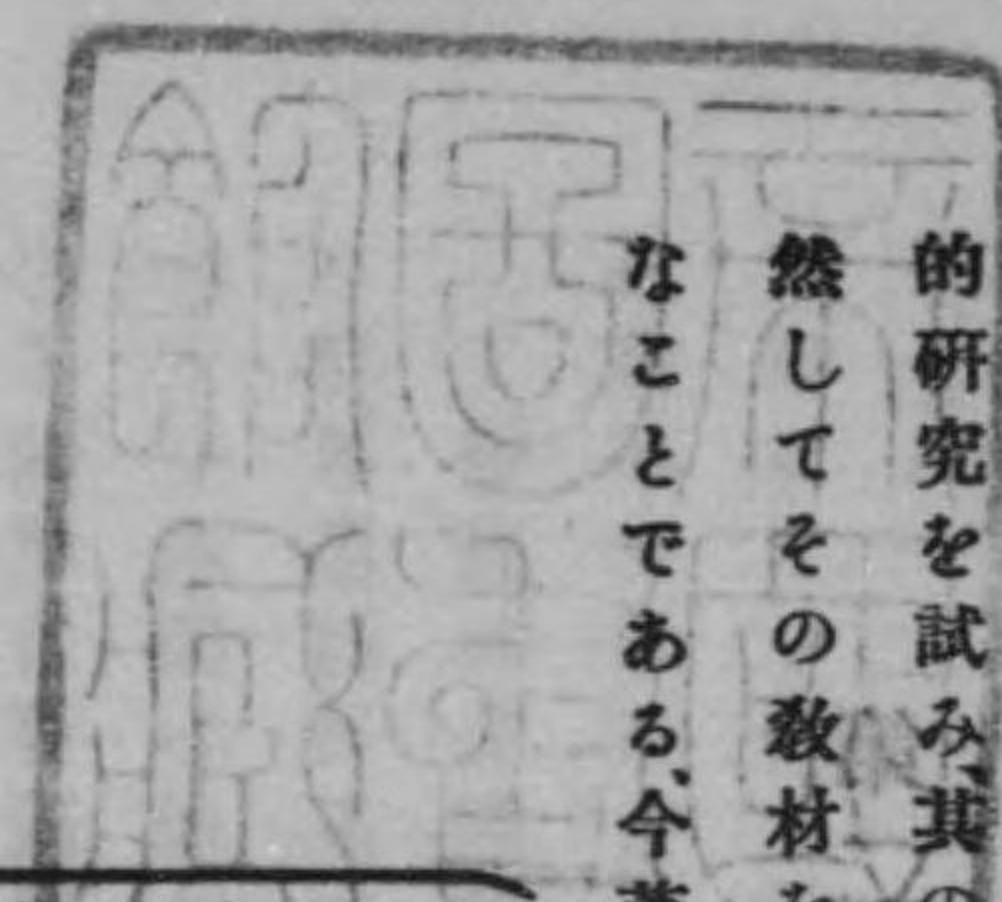
(一頁—一〇三頁)

第一章 體育教材論

第一節 體育科教材の分類

著者は先づ教授法を記述する前提として、總ての體育科に含まれる教材の根本的研究を試み、其の特質及缺陷を序述して以て本論に及ばんとするものである。然してその教材を研究せんとするに、最初之を分類し比較すると云ふことは大切なことである、今著者が之と信する體育科教材の分類を次に表示することとする。

- 一 體操
 - 二 教練
 - 三 競技
 - 四 遊戯
 - イ 競争遊戯
 - ロ 行進演習
- 正課時間の教材



第一章 體育教材論

體操科の教材

ハ、表情遊戲

ニ、律動遊戲

ホ、ダンス

ヘ、重諾遊戲

五、武道

六、登山遠足

七、水泳

Rhythmical gymnastics

主として課外の教材

第二節 體育科各教材の特質及缺陷

一、體操

A、體操の特質

體操は或一定の目的をもつてゐる身體運動であつて、特にそれが運動すべき身體の部位、運動の方法及速力、運動量が豫め定められてゐるもので、解剖、生理、心理の根據を有するのである。即ち最も合理的に人生の生活能率を常的に向上發達せ

しめる所の人爲的の教材である。換言せば學理に基き系統的に組織した身體運動であつて、身體の均整的向上發達を期するのをその特色とするのである。故に體操の各運動はそれ自身特有の目的を具備してゐるが、而しその特有の目的が身體の均整的發育と云ふ一大目的に包括されるもので、之が本教材の根本的特色と見るも差支えない。所謂各運動が組織的に系統的になつてゐて、然して一大の目的を達することの可能なる點に於て、他の體育科の教材に比較して特長ありと言はねばならぬ。於茲體操はハイモニストの育成に合理的科學的教材と言ふことが出来るであらふ、次に本教材の特色とする點を列挙することにする。

- 1、體操は身體各部の均整的發達を目的としてゐる。
- 2、各運動が系統統合の關係を保有し最大目的に向つて有機的に統合してゐる。
- 3、體操は他の運動の準備となるものもあるし又補充ともなる場合がある。
- 4、體操は普遍的の教材であつて其の實施について競技の如く特殊のものではない。
- 5、矯正的教材を包含すること。

人は單に出生その儘の肉體及精神を助長するのみにては不充分である。吾人は出生と同時に又後天的に不正身體姿勢の持主たることが多い。この不正の姿勢と云ふものが、吾人の身心に如何に悪い結果を來すかといふことは最早論するまでもない。之身體の不正矯正と云ふことが大切な所以である。この矯正的教材を多く含むことが體操の重要な特質とせねばならないであらふ。

B、體操の缺陷

體操は合理的な科學的な人爲的な教材であるから、不注意にして實施することは不可能で、又無意識的には行ふことの出來ないのである。それでどうしても之を實施するにあつては、指導者の綿密な注意が必要であつて、丁度醫師が病者にその生活の各場合に注意し、又監督すると同様の感がある。教師の目は彼等の一舉一動に注がれてゐなければならぬ。體操を自由に行ひ得るものは餘程知識に於て意志の上に於て發達したものでなくてはならない。之を要するに體操實施の場合に於ける教授活動をながめて見ると、どうしても拘束的となり易く、彼等の自由的の活動を認むる餘裕を見ることが出來ない。換言せば體操は意志的運動努力

的の運動と言ふ事が出來るであらふ。之れ體操がダンス、表情遊戲、律動遊戲又は輕體操等の様なリズム的な教材とその趣を異にする所以である。斯様に體操は人爲的にして拘束的な教材である以上、餘程教授の方法の研究をなし熟練せる教授法に關する技術を有たなかつたならば、被教育者の倦厭を招き解剖生理的の効果は修められやうが、その心理的效果、特に著者の後編にて述べる情的効果の發揚は至つて困難なものであることを信ずる。

體操は興味に乏しく無味乾燥な缺點があるが之は良薬は口に苦しと言ふことと同じであらふ。教授法の理想は被教育者の自覺的活動を喚起するにある、而してこの自覺的活動の境涯に達するまでには、幾多の階程を經過せねばなるまい。被教育者の發達状態について研究する時、この理想的の教授法を要求すると云ふことが不合理である時が多い。かの幼學年の如きは興味あるところにのみ注意は注がれるのである。體操がこの興味に乏しく無味乾燥であることは、理論的にも實際的にも肯定され得るのである。興味なきところに快情の發することなく自覺的活動の存在することはない。如何に生理的、解剖的効果を發揚する教材だか

らといつても、心理的に缺陷を有つてゐるものは、其の擧ぐべき効果の半を減削するといふことは明らかなことである。從來體操教材が、體育教材中主要の位置を占めても、その實施の結果の不徹底であつたことは、この邊に原因することを思はねばならぬ。余の教授法の研究の動機もここに存するので、所謂「體操を生せ、體操を生せ」といふことは本理論を一貫した思想である。

二、教練

A、特質

教練の特質は步兵操典第一條の意を吟味して見るのが解し易いことである。曰く「教練ノ目的ハ指揮官及兵卒ヲ訓練シテ諸制式及戰闘ノ諸法則ニ習熟セシムルト同時ニ軍紀嚴正ニシテ精神鞏固ナル軍隊ヲ練成シ次テ戰闘百般ノ要求ニ適應セシムルニ在リ」と學校教練はこの形式及精神に則り、一には共同一致の精神の涵養、規律、忍耐、服従心、義務心、自治的精神、機敏、持久力、果斷等の諸徳目を修練せしめ、而して品性陶冶の資となし、一には軍事豫備教育の目的を達する等重大の任務あることを感ずるものである。今や軍事豫備教育の實施を見るに至つたは、誠に

慶賀にたえぬ、而しその反面にはこの軍事豫備教育の不可なることを唱ふるものが少くない、よろしく體育家は、その論據の那邊に存するかを尋ね、その可否に関する明快な見識を持つてゐるの必要がある、この事に関しては最早序論に於て述べたところである。

B、缺陷

教練の特質は前述の通りで再び概括的に言つたならば、體育科教授の準備運動となり、一面諸徳目、軍事に関する知識の修得をはかると共に一面國防上の大任ありと言はねばならぬ。而しこの教練そのものを體育的に批判して見るとその缺陷とするところも又多いものである。

1、教練は拘束的である。

教練は號令的の教授であつて特に最大の精神的緊張を要求する積極的訓練の性質をもつてゐるから、被教育者の自由活動少く變化に乏しく興味を存することがない。それで余程彼等の自覺心の發達した場合でないと實施する事の出来ない性質のものである。結極この教材は身體的價値以外の精神的價値に重大意義

をもつてゐるものである、それで後章に於て述べてある情的効果の發揚上にはあまり面白くない教材となるであらふ。2、教練には被教育者の自由活動なし。から、被教育者の自由の活動に従ひ、諸制式を修練し、嚴肅な精神を涵養するにある。遊戯等の自由を主とする教材と根本的に差異あるところである、自由の活動なきところに興味は存しない、それで現今體育科中の教練と云ふものは稍もすれば形式に流れ精神のぬけたものとなり實績を擧げてゐない。それでこの教練の本質といふものから、本教材實施に關する決心を強くしておくことは最も大切なことである、吾々は教練を拘束的な自由の存せないものとして輕視するの必要を認めない。教練は教練としての特別の目的がある以上、之を實施するに當つて興味の必要はない、教育作用は被教育者の好むもののみを實施するの用はない、彼等の生涯より見て必要なことは彼等が好まないでも實施する事が大切である、要はこの教材を如何なる考にて實施するかと言ふことになる、著者は本教材の本質より

如何に我々は之を取扱はねばならぬかと言ふことについて、心理的の立場より少しく説明しておく。かく本教材は拘束的、努力的の教材である故、その實施に當つては心理上の努力の快感と言ふものを考へるの必要がある。指揮者の犯すべからざる人格と熱誠と、そして嚴然たる決心とを以て彼等にのぞんだならば、彼等は不識不識教師の人格そのものに感化され、教練そのものに全精神の緊張と身體的の努力を以て望むものである。而して一定課業を終へたる後その努力の後を顧みて一の快感を覺ゆるもので、之が努力の快感である、この努力の快感をおこすまでに徹底しないと、自然と教練と言ふものは不規律となり被教育者の好まぬところのものとなつてしまふ、そして本教材の實施は形式にのみ終り、精神のぬけたものとなつて、却つて精神的の効果どころか訓練の破壊となるものであることを注意しておく。之に最も必要なものは前にも述べた様に教師の熱誠とその持久力である。從來中學校等に於て教練の徹々として振はなかつたは、この教師の決心と持久力の缺乏及び中等程度の被教育者を訓練するだけの自信力と意氣とを有せなかつた爲である。かゝる教材を指導する場合最も必要なるものは、指導者の

意氣である生氣である、而しこの意氣と言ふものは元氣と言ふ淺薄なものではなく、教師の日々の修養によつて現れる人格的の輝きでなくてはならぬ。而して吾々は各教材の連絡研究よりして以て教法の研究をしたならば、かくの如き規律的な拘束的な教材を徹底的に實施するそのものが延びて體育上一の變化の附與となり興味喚起となるのである。余の教法研究にはかゝる興味をもその根據として存在するものである。

(3)、教練は幼學年の教材として不當である。

尋常科初學年時代の精神身體の状態は幼稚なものである。而して體育上から言ふとこの七八歳頃から人爲的、具案的、しかもある一定の目的ある體育に移らねばならないが、自然的な生活から拘束的意識的教育に移る過渡期であるから、體育上に於ても最も注意を要する時代である。この時代は體育上からいふと自然的な生活から人爲的體育に移る初步期と言つてよい、それで體育に於ても彼等の自然的生活を根據として實施するところの必要を認めねばならぬ。精神身體共に教育を受くる程度に發達したとは言へ、いまだ完全なものと言ふことは出来ない、そ

れ故この時代の體育は一般的に自由を主とし、本能的動作を利用し、之に人爲的體育の着色をなすのみにて充分と思ふものであるから、この時代は積極的訓練の意味を含んだ教練を(正式の)課するといふことは、教育の根本的事實に矛盾した方法と言はねばなるまい。

4、教練は矯正的教材を包含せぬ。

教練に於て最も訓練されるころのものは精神である。精神的訓練を閑却せるときは、教練と言ふものは、無價値なものであると言つてよい、この精神的訓練といふものは、體操、競技その他の教材に於ても必要なことであるが、教練に於ては、その本質上より最も大切なものと認めるのである。従來の體育は「健全なる精神は健全なる身體に宿るといふ」ことを以て體育の標的として來た感があるが、吾々は又吾人の精神といふものがよく身體を統一するといふことをも深く考える必要をみとむるものである、かく精神訓練を主とした教材であるから、この矯正と言ふ様な教材は體操に比較して微々たるものである。

三、競技

A、特 質

競技の生理的解剖的の價值について述べることをやめ、本教材が如何なる心理的特質をもつてゐるかを明らかにし、又本教材は如何なる體育的使命をもつてゐるかについて研究して見たい。さて本教材の特質を心理的に論ずると本能的で人為的でないと言ふことで、之が體操教練と根本的に差異ある所以である。本能的運動の特質としてあぐべきものは、その運動が愉快に遂行され、又無意識的な活動であると言ふことである。然らば本教材が如何な本能と關係あるやを明らかにせねばならないであらふ。吾人の本能は多種多様であるが本教材と最も關係あるものは自己保存の本能中にある (Self-Preservation) 争闘の本能 (fighting instinct) 及競争の本能 (Instinct of Competition) である。人類の進化中に彼等は實際生活に於て、敵より逃れんとして走ると言ふことを覺えた、又他動物との争闘に於て投石、投槍の必要を感じたのである。攀登るといふ習慣は原始時代に於ける山林生活の殘留である、之と同様に物を握ると云ふ習慣も殘存してゐる、之等は皆人間の本能的の動作である。投げる、蹴る、跳ぶ、走る、競争する、皆これである。幼兒が終日、走り跳び、投げる

等の動作に日を送りゐるのは皆本能的運動の發露である。被教育者が體育教材中本教材を最も好愛すと云ふことは當然であると言はねばならない。この本能的にして運動そのものに快情の隨伴することが本教材の根本的特色であらふ。體操が無味乾燥なるに反し本技は多大の興味を以て迎へられるものであるから、之を善用することに依つて體操の價值をして益々向上せしめることを得るもので、之が本教材の體育的使命なのである。

B、缺 陥

體操の各運動がそれぞれ特有の目的があつて、その特有の目的が身體の均整的發育といふ大目的に統合し、系統的にして有機的の連絡を保持することは前述の通りであるが、競技の各運動は一般的に言ふと全身の運動であつて、特に身體の局部に對して合理的に意識的に訓練をなす點に於ては、體操に比較して甚だ困難なことである。競技の各運動は體操の各運動の様に連絡系統がない、又體操の如く醫療的の教材なく、却つて身體の姿勢を不正にさせる教材もある。且つ又體操の普遍的なるに反し、特殊的教材である。之等は皆競技の有する重なる缺點と言

はねばならぬ、之れ競技が獨立に實施するの不可能なる理由であつて、之が効果を完全ならしめんとするには、必ず他の教材特に體操との連絡補充を要するのである。青年には競技を以て理想的の教材とし、競技高能を説くものもあるが、いかに競技が青年向の運動であるにせよ、體操そのものを輕視したる競技指導は最も禁止すべきものであることを信するものである。

四、遊 戲

A、遊戯の特質

體育に於て遊戯の位置の極めて大切であることは、吾人のよく知るところである。これ遊戯は人類生存上密接な關係あり、且つ人間の本性に適するからである。而して體操の一舉一動が拘束的にして變化及興味に乏しく、劃一的な直線的運動なるに反し、遊戯は自由にして變化の興味に富み、且つ實演者の活動をして最も自由ならしむるもので、直線的運動のみならず優美なる曲線的運動をも含むものである。カアールライム曰く「遊戯に依つて知能を啓發し得」と。遊戯は物理修身の如き他の智的教科に依つて得たるものを實際に於て行ふことが出来る、即ち教科

との連絡を保つたならば、智を博くしその學科の進歩を助けることが出来るものである。實に實踐躬行の道を授け、道德的品性陶冶をなし、智的情的に人間をして完全の域に達せしむるものである。又スペンサー曰く「快感は強壯劑中最良なるものである、血液の循環を盛んにし、各機關の作用を助け、以て健康を高め、不健康なるものを助く」と之本教材の情的効果の大なることを證明せる言葉と言つても差支あるまい、兎に角遊戯は體育上情的効果の發揮に重要な教材たる、と共に他の智的教科等との關係を有するものである。而し體育上遊戯と言ふ教材の觀念は、心理上に用ひられる遊戯の觀念とは異なるものであるから、次にこの觀念を明らかにしておく必要があると思ふ。

B、體育教材としての遊戯の性質

遊戯と言ふ字は、一般に心理學上の語であつて、人間の自然的活動に命名したものである。體育科の遊戯は勿論この本能的な遊戯を根據としてゐるが、その觀念の上には多少の相異がある、即ち體育科の遊戯と言ふものの中には心理學上の遊戯と言ふ觀念の外に體育的思考、教育的思考といふことが多く含まれてゐること

思ふ、今順を逐ふて説明する。遊戯の起源(心理學上に言ふ)の起原は、遊戯の起源(心理學上に言ふ)であるから、茲には極簡単に説明することにする。遊戯の起源に就ては數種の説がある。而し之は心理學上説明されてゐる事であるから、茲には極簡単に説明することにする。

イ、餘力説(Surplus energy theory)

此の説は一名勢力過剰説(Theory of excess energy)と言ひ、英國のスペンサー、獨のシムル等が唱導したので、その大要は次の通りである。吾々人類の如く高等な動物になると自然その營養が佳良となつてその所持する力が生命保存にのみ使用し盡されず、即ち生活力といふものに多少の餘裕を生ずる様になる、その餘れる勢力が外部的動作として現れたものが遊戯であるといふ説である。而しこの説を全く信用することも出来ない、何となれば病床から離れた小兒が直ちに好んで遊戯をなす實際を見ても明らかなることであらふ。

此の説は一名疲勞説とか厭倦説とも云ひ、獨のグライツムツ氏、佛のモワツツアル

ス等が唱へた。曰く「人間の休養に二つの方面がある。一は活動的の休養であり、一は靜止的のそれであるが、遊戯はこの活動的の休養に他ならぬ。」との説で、殆んど吾人の實際生活に符合する様であるが、之とても完全な説といふことは出来ない。

此の論は十九世紀の中葉、ヘツケルの個體發生は系統發生の経路を反復するものであると言ふ前提から來たもので、人間が始めて胎内に宿つてから時日を経過するに従つて、其の精神界にも肉體界にも、その状態を變化して成長し、完全なる人間に迄到達するその過程は、人間が單細胞から進化して今日の人類まで到達した系統發生の過程を踏むものだと言ふ説である。系統發生の過程には穴居時代も石器時代もあつた、それで今日の進化した人間の發達過程にも、かく原始時代になされた、簡單にして下等なる生活の痕跡と見るべきものが存在するものであるが、かくの如き動物的即ち原始的の本能の如きは畢竟廢滅に歸すべきもので、其の爲にはそれが無害なる仕方では働かされなければならぬ、この無害なる仕方が我々が

遊戯と命令すべきのであるとの説である。この説に類似する意見を米國のスタ
ンレー、ホール等も唱へてゐるものである。

ニ、反覆説(Recapitulation theory) 補充論、準備説

自己育成論(以上心理學參照略之)

2、體育科中の遊戯の觀念

以上心理學上に於ける遊戯に關する諸説は、皆完全な説明と言ふことは出來な
いが、遊戯が一の本能であつて、而して之が吾人一生涯に於ける發展といふものに
重大な意義の存するといふことに關しては、識者の論の一致するところである。
而しこの心理學上に於ける遊戯としてあぐべきもの千種萬様であるが、之を一般
的又は原始的遊戯と命名する。さて、この一般的遊戯中には教育上有害なものも
存在する、それで體育的教材とするには、この一般的遊戯から教育的標準に依つて
選擇せなければなるまい、この選擇されたのが學校の自由遊戯である。この教育
的なるものを體育科の教材とするためには、或は之に體育的思考を加味することも
必要であらふし、又體育的效果の可及的多いものをえらぶ必要もあるだらふ、かく

して體育科中の遊戯と言ふものは、その範圍を制限されたものとなるもので、斷じ
て心理上の遊戯と同一であると云ふ様な觀念は誤つてゐると思ふ。而し吾々は
文部省の表示に従ひ體育科中のものをも遊戯とすることは差支ないが、その觀念
を明らかにしておかねばならない、今之を圖示すると次の様になる。



0、リズムミカル教材の特質。

1、リズムの意義

リズムミカル教材は、前に體育教材の分類のところを示した様に、遊戯として實際
授業に活用されてゐるのである。それでその特質に就ては遊戯の特質のところ
に含まれてゐることであるが、その詳細な部分に及んでゐないから項を改めて説
明することにする、この概念中には行進練習、表情遊戯、童謡遊戯、ダンス等を含むも

のであるが、之等を一團としてリズムミカル教材となした理由は、各教材それぞれ異つた體育的價值及特質をもつてゐるが、その根本的にはリズムを基礎とする運動であるからである。即ちリズムを體育上に利用した點に於て皆同一である。故に著者はリズムミカル教材の特質を述ぶるに先だつて、リズムの意義を明らかにせんとするのであるが、元よりリズムと言ふことも色々に解釋の出来るものであるが、要は同一事項の規則的の反復といふことが出来ると思ふ、元來吾々の機體上の作用は定時的な復現をなす性質をもつてゐるのである。例へば呼吸、脈搏、鼓動等は、その最も顯著なものであらふ、是等の作用は皆異なつた方向をもつてゐる二つの運動から成立するものであつて、そして相互に條件となつて連結し、一の統一作用を營爲するもので、即一の緊張(Strain)は弛緩(Relaxation)の條件となり、弛緩は次の緊張の準備となり、一張一緩は離別することの出来ない關係に於て結合して、全活動をして容易且迅速ならしむるものである。かゝる吾人の生理的の狀態があると、吾人の生理作用は順調にしかも容易になる、斯様な關係的なものをリズムと言ふのである、つまりリズムミカル教材は音曲を利用して體育的價值を發揚せんとする

に他ならぬのである。かゝる關係が心理的方面に存在する時は、必然的に快情の發動となり期待の狀を生じ、従つて注意力を喚起し、延ひて彼等の自發的活動を呼び起こすことが出来るものである。

2. リズムの本能的價值

リズムと言ふものは先づ右に述べた様なものであつて、人間のあらゆる方面に關係と價值とを有するものである、今こゝにリズムミカル教材が如何なる價值を體育上にもつてゐるか研究して見たい。著者が第一に擧ぐるところのものは、本能的な價值と言ふことである、而し本能上よりの價值を述べんとするには、本能といふものゝ大略を述べねばならぬ、この意義を明らかにするには、心理學上の聯合といふことから研究することが大切である、何となれば本能といふものは一の聯合であるからである。今茲に一の精神活動が現はれた時、この活動が其儘消滅することなくして、他の精神活動を喚起する常習的な傾向があつたとする、この場合前なる精神活動を暗示といひ、後なるものを反應といふのである、かゝる關係的な活動を聯合と云ふのであるが、この聯合には先天的なもの、と後天的なものがある、即ち

本能の如きは先天的の聯合であつて、習慣の如きは後天的の聯合であると云つてよい、又本能といふことを他方面より解釋したならば、本能とは一定の目的の自覺もなく、又之を遂行するところの豫備教育もなくして、人生の或目的を遂行する様に行動する先天的の性能とも云ひ、生理學的に定義したならば、一定刺激に對する感覺神經の興奮と、之に對する動神經の一定の反應との、先天的聯合と言ふことが出来るのである。兎に角本能と言ふのは先天的のものであり、自然的に發露する身心の潜在力である。ダンス、表情、童謡遊戲に行はれる運動はリズム的の運動である、その起源は人類の原始時代にある、而してかゝるリズム的の運動は一のリズムである音曲に調和して行はれる、現今に於ても野蕃人の中には笛や太鼓を用ひて踊つてゐるものがある、リズム的の運動、リズム的の音曲を好む性は人間の自然であると言つてよい、かく自然性のもものは人間に一種の快感を覺えさせ、且つ無意識的にことを遂行される力を有するもので、リズムを體育上に利用することに依つて、一には精神界に慰安を與へ、肉體的には無意的の運動をおこさしめることが出来るのである、之れリズムミカル教材の他の意識的な快味に乏しい體操等と異なる特質を有する點である。

3. リズムの生理的價值

音曲等のリズムが吾人の身心に多大の効果を及ぼすといふことは明らかなきことであるが、就中精神を爽快にし、その所有する思想、感情を純潔高尚ならしめ、或ひは分泌腺を刺激してその分泌量を増加し、一般消化機能を順調ならしむること等は其重なるものである。テオフラストス、ガレンの書いた古書にも、音楽が毒蛇に喰まれた時の最良の治療劑とせられてゐるさうである。之れ音曲の生理的價值を認めたものであると云つてよい、生理學者メンツは實驗的に心臓の搏動、呼吸が音響及拍子を聞くに際して影響を受け、爲に脈膊數を變じ呼吸器に依つて記録された山又は谷は拍子の數と一致せんとする傾向をもつものであると言つてゐる、之は、ロイマン、ドギール等の生理學者も承認してゐるところのものである、又歐洲大戦亂に於て廢兵の收容に當り音樂的裝置のあつた病院の兵士の全治が他に比し、甚だ速やかであつたと言ふことも佛國に於て經驗された様である。かくの如くリズムそのものは莫大な生理的價值を有するのである。又ホールと云ふ人

は、吾人の基礎的の筋肉といふものは、律的の活動をなす傾向を先天的に具有してゐると言つてゐる。ワシントン大學教授のエルマーグーツは、吾人の血液の化學的組織に眞に變化を及ぼすものは快樂なることを論證してゐる、そして快樂は心臟の鼓動呼吸を善良にし消化力を増進するとも言つてゐる。それリズムは快情發動の原因である、故にリズムミカル教材の効果は生理解剖的の効果を修むると同時に、心理的効果を發揮する點に於て體育上重大な意義を有するものであつて、これが體操に比較して一大特色するところである。従來の體操教授は只體操萬能にして拘束的號令的の偏教授に陥り、被教育者の心理的方面を無視したるの感がある、と信ずるのである。

4、リズムミカル運動と自動運動

心臟の活動腸の蠕動運動の様なるものを自動運動 (Automatic movement) といふのである。即ち意志の關係なく遂行される運動を言ふのである。而し心臟の運動の如きは自然的のものであつて、之を第一次自動運動といふ、反之初めは意志的の運動であつたものが反復によつて無意識的運動となる場合がある、之を第二次自

動運動といふので、又は半自動運動、小供の意志的な歩行から大人の無意識的な歩行に移る過程を考へることに依り肯定されるであらふ。リズムは確かに吾人の運動をして自動的にする性質をもつてゐる。疲れた行軍に喇叭を吹奏する時、足は自然的、無意識的に動き、疲勞をさまで覺えぬであらう、即ち律は吾人の有爲的運動を自動化し、吾人の力の經濟及利用を適切ならしむるもので、之を體育上に利用する時は、精神を過勞に陥らしめず、身體を訓練し、又向上せしむることが出来るもので、體育の一の理想である精神の疲勞を省きて、身體を修練すると言ふことに合致することが出来るものである。

5、リズムミカル教材の體育的使命

イ、女子體育と本運動

女子が男子に比較して先天的に精神上及肉體上に缺陷をもつてゐることは明らかである、爲に體育指導上に於て最も困難を感ずるは女子の體育指導である、ことを經驗するところである。今身體上精神上女子の有する缺陷の重なるものを列挙することに、詳細なる説明は最早他に研究されてゐることであるから、

本書には之を省略することにする。即ち生理上より云へば、

股關節の不完全なる構造。

臂力の先天的の軟弱。

フラットフット。(扁平足)

重心の關係。

脛筋の先天的軟弱。

血球の數。

心臟の大きさ……男の一〇に對する八の割合。

脈搏數……男七二に對する女は八〇(一分間)。

肺活量……男は一升八合に女は一升二三合。

呼吸數……男十二—十八、女十八—二十四。

月經。

精神上より云へば

感情的であること。

名譽心に強い。

競争心が強い。

嫉妬心が強い。

剛毅果斷の徳に缺乏してゐる。

羞恥心に強い。

かく女子が身體上、精神上の缺陷をもつてゐることに依つて、體育指導に困難を感ずることは明らかなことである。而してかゝる缺陷が何故體育指導上の障害となるか、又その取扱はいかにするか、の細部に亘る研究は、讀者のよく研究せねばならぬ問題と思ふのである。要するに右の事項を考察する時、女子に鍛練的の指導及男性的の運動の實施の不合理と言ふこと、月經時に達した女子の體育指導の顧慮せねばならないと言ふことは最も明らかなことである。故に女子は運動としては跳躍的の運動及懸垂運動の様な力的運動や、垂直的の運動は不得意と言はねばならぬ、又心理上より言つたならば、果斷、忍耐心、持久力を要する様な運動は駄目である。故に男子に要求すると同じく活動的、鍛練的、力的の教材を課するは、絶對

此不可能であることを信ずるのである。而して吾々指導者は、この女子の先天的な缺陷を漸進的に向上せしむることの大切なることについては、莫大の注意を要すことである。女子は一般的に感情的にして、少なる刺激に對してもその感受性は強い、而して高學年の女子になると、身心共に性的方面に甚しき向上を見るから、一般に憂鬱な感情の所有者となるのである。故にこの時代の女子に適切な體育教材を選択し願慮して、この憂鬱な感情を發散せしめ、満足せしめ且亦之を美化し、快々の裡に彼等の心身を教養して行くことは、最も體育家の念頭におかねばならぬことだと思ふ。故に教育者はかゝる状態には、かゝる状態に適合した教材を配當し、而して體育の目的に到達する様思考せねばならぬ。女子高學年に於ける體育は元より體操を主として行はねばならないが、時々このリズム的な教材を採用せねばならないと言ふことは、その状態と教材の本質上から考へて肯定されなければならぬ。スバルタがあれ程まで硬教育を標榜し乍らも、その反面に於て音樂的教材を以て之を調和したと言ふことは、最も思慮ある方法として尊重せねばならぬと思ふのである。

ロ、幼學年の體育とリズムミカル教材

幼學年の兒童が、自然的な家庭生活から具象的な教育の場所にはいつて來る。この期を學齡と言ふのである。この自然的な生活と正式な教育に移る過渡期に於て、尋常科一二年の状態は教育上體育上最も注意を要する時代である。體育は人爲的規律的のもので、或一定の目的をもつてゐる。而して兒童にこの人爲的な體育を實施するには一の階程がなくてはならぬ。この時代の體育の主とするのは消極的の方面である。その消極的體育を主とし積極的體育を附帶してなすが適切と思ふ、如何に合理的な體育教材でも被教育者の身心の状態に適合しない教材は全くその効果を收むることは不可能である。故に小學校一二年生位に拘束的な強い運動を實施する様なことはよくない。此の時代は本能生活を基礎とし之に人爲的な體育の着色をなす位で充分である。彼等は跳ぶと云ふことを喜び、歌ふといふことを好む、而して音曲を聴きて快情をおこすは人間の自然性である。この點より云ふと表情遊戲、童謡遊戲等の教材は最も彼等に歡迎されるところのものである。又著者はこの期の状態と教材の本質とよりしてかく云ふのみでな

く、彼等の智育、德育方面との關係より少々論じて見たい。一體、表情遊戯、及童謡遊戯の教材を分解的に思考して見ると、言語(所謂文字)と感情、及曲の三つの要素から成立つてゐる。而して曲即ちリズムが、體育上如何な價值があるかといふことに關しては最早述べたところであるから、こゝには本教材の言語、及感情の上に生ずるところの、教育的價值について述べることにする。そして幼學年の體育教材として、リズムミカル教材中に於て、表情遊戯及童謡遊戯を主とせねばならぬと言ふ理由まで徹底して見たいのである。本期の教育の狀態を見るに、智育にせよ、德育にせよ、彼等の以前に經過した自然生活を根據としてなされるものであることは疑ない、このことを明らかにするには、かの幼稚園に於ける教育の一般を見ると、明らかとなるのである。今幼稚園教育に於ける感情教育及智育の一般を見るに、その教材として、談話、唱歌遊戯を根本教材とし、談話には、寓言、物語、歴史談等を主なるものとして、それによつて彼等の智的方面を輔導し、彼等の身體的方面のためには、リズム的な本能的な遊戯を採用してゐるのである、即概括的に云へば、遊びそのものゝ中に智育も、德育も存するのである。物語の中に智育あり、感情の陶冶もあり遊

戯の中に彼等の體育は包含されるのである。尋常一二年位の教育は正式の學校教育に入つたとは言へ、その幼稚園時代の教育を根本としてなされるべきものであることを信じて疑はない、幼學年に於ける智育の主とするところは、正確なる事物觀念の收得である、而して未だ教育の過渡期にある兒童に對して、高學年の智育の如く作業的色彩を帯びた智育は不可能であると言はねばなるまい、彼等は談話の中に事物の觀念を修得し、彼等は歌ひながらにして、諸種の教訓を得、彼等は歌ひ且つおどりながらにして自己の身體を修練するのである。而して又彼等の感情は、寓言、物語、唱歌の中に陶冶されて行くのである。教育上、教材の有機的關係といふことを云ふが、此時代の教育に於て最もその感を深うするものである、表情遊戯、童謡遊戯の實施は、延いて諸種の觀念の修得となり、之によつて純なそして美しい感情は陶冶されるもので、只單に童謡遊戯、表情遊戯を以て體育教材のみとするは未だ深き考へと言ふ事は出来ないが、之が此時代の智育、德育とに大なる關係あることを知らねばならぬ、之れ結局之等の教材の文字と感情といふ要素より現はれる價值であつて、他の律動等の價值と全然その趣を異にする點である、かくリズム

カル教材は體育的價值以外に多大の効果を持つてゐることは特にこの期に於ける體育教材として認めるのである。故にこの教材の實施の中に規律的訓練を與え體操的の訓練も與えて體育の理想に近づかねばならぬ、それで細目の編成にも幼學年及高學年の女子にはかかる教材を比較的多く採用するの必要を見るものである。

6、リズムミカル教材と美育

美的趣味、美的情操の人間生活に必要なことは最早論ずるまでもない、その意味から教育上、智育、德育、體育の他に美育の必要な所以である。教育學者中にも特に教育を智育、德育、體育及美育の四項目に分類して研究してゐる者もある。體育はこの美育と密接な關係をもつてゐるものであるから、吾人は美育の一般概念を知り、體育をして之に關連して考へることが大切である。從來の教育に於ては、あまり美育といふことについて唱へてゐないが、最近に至つて之を重く取扱ふ様になつた、特に現時の如く物質文明、智的文明の進歩につれて多忙複雑となつては、人間として美的方面の陶冶をなすといふ事は重要な問題である。人間は美に依

つて生活を飾る、人間の精神状態を考へて見ても、美醜といふことは大切な部分をなしてゐる。吾々は單に物を考へたり理解するばかりでなくそのことに就いて美であるとか醜であるとかいふ評價をつけるものである。又人間一生の上から言ふも物を知つてゐるとか働くとかいふ以外に美的方面の事柄が多くあるのである。美的の趣味をもつことは人生の重要なことである、むしろ美は生活の一要件であらねばならぬ。かのスベンサーの言葉の様に、美的方面を以て人生の要求の中で最も末なものであるといふことは出來ない。美的生活は人生の要求の中で末なるものどころか重要な一つで、美を欲求するのは人間の通有性である、人間として一生を過す間には機會の許す限り、美的の享樂を受けて終るといふことは何人も望ましいところである、古代希臘の體育はそれ自身美的のものであつた。彼等は肉體美を以て理想美とし、之を尙び之を體育に於て求めんとしたものである。而してこの美育といふことは色々變化し進歩して來たのであるが、それはこの美といふ觀念が色々に變化した爲である。シルレルは次の様に言つてゐる。行爲も知もその理想的状態は美である、それで眞も善も皆この美といふ觀念の中

に包括される。そこで教育の目的は美である。シムレルの如く美を斯様に解するならば教育の目的は美であるといつてよい。而し之には色々の論もあることであつて我々の論すべき部類でないけれども、特に研究して體育に關する自信力をつくるがよい。兎に角美については眞善美一體を唱ふるものあれば、又美的萬能を唱へるものもある。而し吾人は美は教育の目的でなく、教育の一部であると考へておく方がよいであらふ。教育學者もこの見界をとつてゐる様である。さてリズムカナル教材がこの美育と密接な關係があるといふことを述ぶるに當つて、美育はいかなる方面に、如何なる方法に依つて行はれるかといふことを知らねばならぬ。美は通常二方面に分類される。

○天然の美又は自然美

○人工の美

象形の美

音樂

唱歌

言語
動作
詩歌

さて美を分類すると右の様になるが、美育の任とするところは、それ等の美の作出と鑑賞力を彼等に啓發することだと思ふ。而しその方法について考へると二つの方面に分れる。一は知識による美育であり一は直観によるそれである。知的方面の方法は餘程知識の發達したものに對する教育であつて、中等學校程度以上に於ける方法である。例へば一の藝術品と他とを比較し研究せしめる様なものはそれであるが、之にも元より直観といふことをおろそかにしてはならぬ。さて又直観によつてなされる方法は比較的幼稚なものになされる方法であつて、知識を根本としないで専ら直覺を主としてなされる方法である。ここにリズムミカル教材は音樂、唱歌動作を主とするものであり、美に關係深きものであるから、この教材の實施に依つて彼等の美に對する鑑賞力の養成、及藝術的興奮を與える機會多き特徴がある。例へば身體の運動の優美を自覺せしめ、又は筋肉美を味はしめ、又音曲

と動作との融合調和の美を實感せしむる等の關係をもつてゐる。然るに茲に最も注意すべきことは、體育とは美育ではないといふことである、その差別を誤つてはならない。而し教育の各教材は有機的關係を保持せねばならぬから、かゝる關係が存在することを念頭において教授に臨まねば、かゝる教材の眞の指導といふものは不可能であると思ふ。

7、ダンス理論

ダンスは元よりリズムミカル教材中に含まれるものであるが、この教材は現代體育に於て、最も世人の力と興味とを傾注してゐるもので、又特別の發達歴史を有するものであるから、ここに特記することにする。

イ、ダンスの生物學的觀察

ダンスは人間否動物の本能である、生物學的に言へばダンスは人間のみなならず他動物にも之を見ることが出来る、ダーウキンの進化論 (Evolution theory) 等、そのことを知ることが出来る、一體動物が兩性を有する様になつてから生殖の本能及種族保存の本能のために、色、香、美、力、動作を以て異性を引きつけると言ふことは明

らかである、この動作が所謂ダンスの萌芽といふことが云へる。而しかゝる動作は人類の如く進化するに従つて、只單に兩性和合の一手段として用ひらるゝに止まらずして、延びては一種族の和合の手段となる様になつた、而して順々とその範圍を擴張されたのである、こゝに吾人はダンスの社交性を認むるものである。かく人間生活の複雑となるに従ひ、他の動物より異なる部分を生ずる様になつた、それでダンスもその異なる生活と關係して發達して來たもので、單なる性的の關係とか同種族の和合といふ意味に止まらずして、他動物に見ることの出來ない人生の或場面に特別な關係をもつて發達して來たものであり、而して今日の様に各種のダンスを形成したのである。人生の或場面と言ふのは他の動物の生活と異なるところであるが、吾人はその異つた或場面を生じた原因について考察するの必要がある。鳥は巢を造り、リスは恰んど意識的活動に類似する活動をなすけれども、未だそれは意識的と言ふものではなく、一の本能的の動作に過ぎない、「人間は本能的動作の他に意識的動作をなすものである、人間には自己意識がある、而して人間として理想を建設するその理想に向つて人間社會を創造して行く」とパウ

ルゼン(Pausan)は言つてゐる。茲に人間は他動物に比して特別な、人生の場面を展開して行くものである。

ロ、ダンスの藝術的觀察

右の様にダンスは人類の原始時代から存在したと言ふことは明らかなきことであるから、之に關係した藝術心といふものが餘程以前より人間の奥に潜在したといふことは、又容易に指摘されることである、藝術は美の作出及鑑賞であるが今之を分つと次の様になる。

靜的藝術——造形美術——(建築、繪畫、等)

動的藝術——(詩歌、音樂、舞蹈)

特に動的藝術といふものは、舞蹈から發してゐるものである、之より見てダンスは原始時代から存在し、この藝術と深い關係をもつてゐることが推測される、而しこのことに關しては、美育の部に於て述べたから省略する。

ハ、ダンスの發達上の觀察

人類の進化中、人類のこの宇宙の現象に對する驚異は、この宇宙なるものに或る

主宰者の存することを感せしめたのである。この宇宙に對する驚異が宗教哲學科學の根源をなしたのである。即ち宗教はその驚異に對して人類が安心立命を求めんとする考へから、宇宙の萬有を支配する絕對者、即ち神佛の如きものゝ存在することを直覺的に意識して之を信仰し、この絕對者と人間との關係を認め、信仰に基きて一の教義を見出し、此の教義に適合するところの行爲をなし、又はなすべきことに努力せんとするを言ふのであるが、又延ひてこの驚異すべき現象に一の因果關係の存することを豫想して、思辨に依つて之を説明するの好機心を湧發した、之科學哲學の萌芽と見るべきものである。而して科學及び哲學の起つたのは餘程人類が知的に進歩してからのことであつて、最初長足の進歩をなしたものは宗教であると言つてよい、次に宗教とダンスの關係及びその發達を述べる。

○宗教ダンスの起源(Religious dance, Sacred dance.)

之は一名御神樂と言ふ。人類は絕對者即ち神も人と同様に知情意の所有者であることを認めた、そして或時は生物を殺して捧げた、或は香を焼いた、フィリッピンの謝肉祭(カーニバル)の如きはよく之を證明してゐるものである、而

してこのダンスが人間に好まれるところから之を神前に於てなす時、神も人間と同様に愉快に感ずるものであるとして、之を神前に行ふ様になつたので、之が宗教ダンスの起源となつてゐるのである。こゝに於て吾々は、ダンスが快情の發動となり、興味あり而して傳習的のものであつて、之を好むのは人間の自然に出たものであると云ふことが歴史的に證明される譯である。日本に於ける天の岩戸の踊を思ひ、ホーマーの詩中に神の踊つたことを書いてゐるのを見ても、ダンスが如何に古代より重要視されたかを識ることが出来る。

○戦争ダンスの起源(War dance, Sward dance.)

人類は漸時に増加した、而して團體生活を生じ尙進んで國家的觀念を意識するに及んだ、個人的の競争は民族的、國家的と變化して來たのである。而して争闘の激しく武器の簡單な時代に於ての唯一の力は體力より他になかつたのである、彼等は體力の大切であるといふことは既に意識してゐたことであるが、身體といふものを科學的に修練するといふことについては、現今に比較して余程幼稚なものであつたに相違ない、然し早くよりこのことについて努

力したものは希臘民族である。希臘は各小都市に分れ常に争闘は續いた。周圍には彼等の強敵があつたので彼等が國家を擧げて體力の修練といふことに熱中したと云ふことは當然なことである。それで彼等は戦争に摸倣したダンスを作つて青年男女に課し、その士氣を鼓舞したものであつた、之ダンスが時代の要求に依つて變化したもので之等のダンスを戦争ダンスと言ふのである、彼のブライトンは、戦舞を評して次の様に言つてゐる、即「演舞中身體を迅速に回轉するのは、是敵の彈丸飛箭を避くもの狀を現はすと同時に敵を攻撃する態度を摸倣したものである」と。日本に於ける舞はワトダンスの一種と見て差支あるまい。

○社交ダンス(Social dance)

ダンスの起源は兩性の融合一族の和合、社會の融合と言ふ根底を有つてゐる、茲に社交性の存在を認める、かくダンスは社交性をもつてゐるから社會の發展するに従つて、社會の融合の爲の手段として用ひられる様になつた、之社交ダンスの起源である。故に社交ダンスの目的は自己の人格を向上せしめ社

會と融合し、以て社會的平和を維持して行くのにあるのである。故にこのダンスは團體的に實施される形となつてゐる。日本に於ける豊年踊、盆踊及外國のフォークダンス等は、この種のダンスにはいるのである。

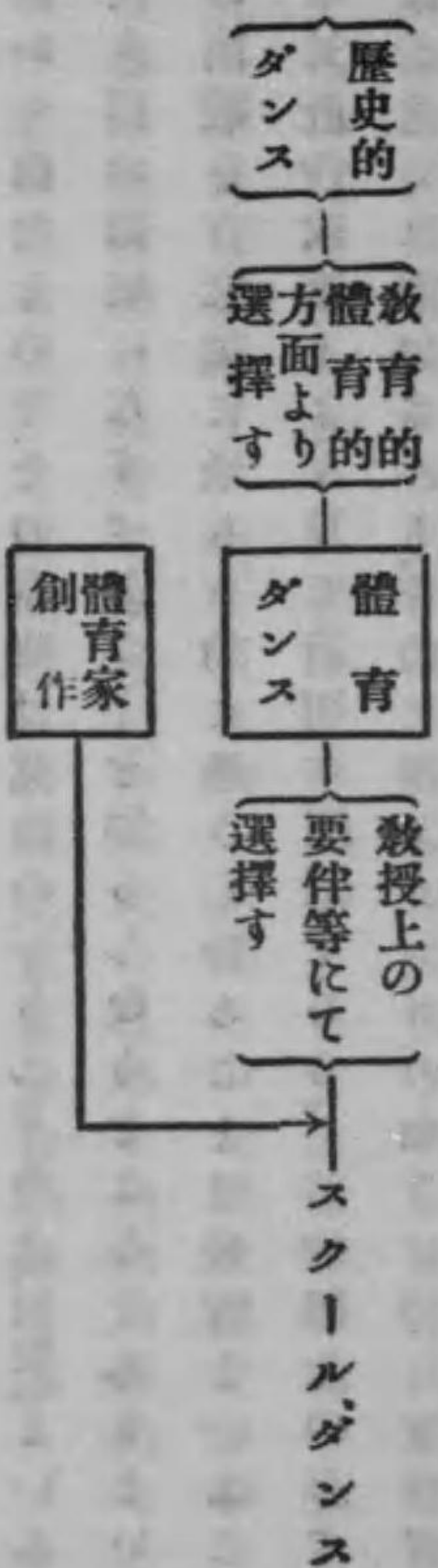
○演劇ダンス(Stage dance)

演劇ダンスの意義は之を體育ダンスと比較することに依つて明白となるものである。體育ダンスの目的は自己の向上、人格の向上であるが、演劇ダンスは観客と言ふ特別な目的をもつてゐる、即ち観客のために歓迎せられ観客に一の藝術的興奮を與えるのが目的である。所謂その目的上に於て一は自主的であり一は他主的であると言ふことになるものである。

○體育ダンス(Gymnastic Dance)

體育ダンスは、身心の修練のために特に體育的見地よりして、或は創作し又選擇したものであつて、その目的は教育の目的に統一さるべきものである、而して體育ダンスと雖も之のみにては體育全部の目的を達することは出来ないが、體操の心理的缺陷を補充し、特に高學年の女子幼學年の兒童には必要なる

補助教材なのである。或る人は、スクールダンスと命名してゐることもあるが、之は體育ダンス中、特に體育教授時間に適當なる教材に對し言ふのであつて、決して體育ダンスとスクールダンスとの間に本質的の差はない。今體育ダンス、スクールダンスの觀念を明らかにせんため圖示することにする。



8、ダンスの社會的意義。

美に依つて生活を飾らんとする欲求は人間の通有性である。人間の人格の高下は實に美的觀念の相異に依つて知ること出来る。換言すれば人間の趣味の如何によつて個人的には其の人の人格を知ることが出来、國家的にはその一國の文化教風の程度如何を判定することが出来るのである。スクールと言ふことはラテン語から出たもので、その意味は英語の(leisure)であり「閑暇」といふことであるが、學校は人間の閑暇になすべきことを知らしむるところであるといふ意味である。吾人の閑暇を有意義に最も有効に過さしむることは教育といふことの重要事項である。又社會政策上より見て適切な問題である。美的觀念の存するところその生活は美化され調和される。音曲に伴ふダンスの如きは特に演技者に快感を與え不快を忘却せしめる。而してその所有する思想感情は、優美純潔となつて行くものである。凡そ社會に於ける人情の荒み不平不満の聲おこり四圍の融和を缺くのは、皆この美的觀念の缺乏に原因するところが多い。慰安なきところ、感情の満足なきところ、總て不平不満人情の荒みを生ずる。特に生存競争激甚にして外部的

壓迫の甚だしい今日に於て最もその感を深うするのである。實にこの點より觀察するとかの公設娛樂場の様なものは重大な社會的意義を有するものと言はねばならぬ。工場に働く女工にダンスを課する時如何に彼等の感情は柔らぎ、慰安を與え、其仕事の能率上良好な影響を與えることであらふ。深く思考すればこの美的觀念の養成、美的情操の陶冶として生活の美化といふことは、社會政策上の大切な部分と言はねばなるまい。特にこの理論をして高學年の女子體育、中等學校高學年の(男子)體育に應用する時、さらにかゝる觀念の必要を感ずる事であらふ。而してまた從來體育科の教授の方法が、拘束的に、沒趣味的、無興味的であつたことを批難せずに居られない。之余の教法研究の重大な着眼點である。今中學校上學年の男子の狀態を見るに、彼等の身心は成熟に近づき、その心的作用に至つては大人をも之を凌ぐものあるの狀態で、身體的には勢力充實して余りあるの時代である。而してかゝる狀態にあるにも關らず、彼等が日々受くる精神的苦痛は現今に於て特に過重ではないかと思はれる。即學校生活に於ける彼等の自由の天地はグランドである。而して體育教師が從來の様な教法を用ひ毎日毎週千遍一律な拘束

的な自由活動に乏しき教法のみを用ゆる時、彼等の壓迫せられた感情及活動的な勢力を何處に發散することが出來やうか、知識は彼等の目前の生活に直接的な關係がある、故に、彼等はいやく／＼乍らも努力的に學科に對しては奮闘して行く、身體の強健は永久的にのみその價值を感ぜらるべきもので、目前の生活に直接の影響はない、故に彼等が身體の健康を任る體育そのものについて無關心であることは自然であると言はねばなるまい、かゝる場合體育科教授そのものを常に拘束的壓迫的ならしめたならば、上下より壓迫された彼等の感情は荒み、之が體育教師そのものに對して發動するといふことは當然である。かの學校のストライキは此處に原因することを余は堅く信するのである。然し余は體育科そのものを以て被教育者の慰安物でないと云ふことは充分熟知してゐる、體育科には體育科としての一定の目的の存するものである、只要は從來の教法を改正し、各教材の取扱と配合を適當にし、體育ダンスの如きも採用し、この弊害を除去せむとするのである、後に述べる余の教法は一見運動量に於て小なる觀があるがそれには理由がある、従來の教法は體操萬能の教法にして、その運動量に於て大なる觀があるが興味乏

しく被教育者は勿論教師も體育そのものを棄避する状態がある。心理的に缺陷あり持續的でない教法では到底體育の終極の目的を達成することは出來ない。

9、表情遊戯及童謡遊戯の理論

イ、表情に就て

表情は内界にある感情の表現である。内界に於ける吾人の精神活動は必然的に顔面又手足の如き身體の表面のみならず、生理作用に於ける變化として内部的にあらはれるものであるが、通常吾々の表情といふのはその身體の外部にあらはれるものをいふのである。故に感情の外部的の表現は身體の手足に至るまで表現さるべきものであるがその代表的表現の部は顔面であらふ。表情遊戯、童謡遊戯共にこの表情といふことを重く取扱ふの必要があるから、今重なる感情とその表出の具合を次に説明することにする。

α、恐怖の表出

恐怖は生後二十四時間にして現はれると言ひ、或學者は二ヶ月、四ヶ月後に現はれるとも言つてゐる、この恐怖といふことは一の防禦的の情緒である、この表出に

ついでランゲ氏は次の通りに言つてゐる。即ち内界に恐怖の情緒おこるや随意筋の表出は悲哀の場合よりも更に無力となる。恐怖の極端な場合になると全身體は不動性となり、聲は振動し終ひに墮となる場合がある。又筋肉は收縮の状態となつて顔面には縦の皺を生ずるのである。腺の分泌は涙腺唾腺の働きが停止され、爲に口中乾き舌は顎に附着する様になる。於之冷汗出で皮膚には粟を生ずるのであつて、血管及心臓は痙攣の状態に陥り死に至ることがある。故に外面的の状態は毛髮立ち蒼白となり消極的態度となるもので、顔面には皺を生ずるのが特徴であると説明してゐる。

b、憤怒の表出

之は攻撃的の情緒であつて又自己保存の情緒である。生後二三ヶ月にして生ずると言ふ説もあるが、ペレーによれば生後二ヶ月と言つてゐる。又ダーウキン、ブライエムによれば生後十ヶ月にして現はれるものであるとも言ふ。その表出の重なる特徴は血管の擴張であるが、その最も著しい部分は顔面特に額である。皮膚に於ける血行は増加し其結果皮膚は赤色を呈する。之が亢進して激憤になると血

管破裂して死に至る。随意筋の活動は一般的に亢進するが、その活動たるや錯亂して痙攣性である。例へば手當り次第物を破壊する様なものである。唾液の分泌量は増加するのみでなく、その中に毒物を含むに至るものである。又ヴァイン、スウイーターン、ピシャ、トルソーの諸氏の研究に依れば、憤怒の時には唾液中にプトマインと稱する毒物を生ずると言つてゐる。結核情緒が表現する顔面筋の活動を普通表情と言つてゐるものである。

c、表情の心理的性質

身體的なこの表情は之を心理的に三つの方面から解釋の出來得るのである。その一は種々の情緒に依つて顔面身振及其他生理作用に現はれその表情運動は曾て有用であつた運動の、只今に至るまで残存してゐるものであると言ふことである。例へば幼児の啼泣するは自己の所在の不明なる場合、又他から危害を受けんとする時の様に他人の救助を要する場合に、他人の注意を惹起せしめんがため有用であつたもので、その必要なき今日に於ても尙その反應だけは残存すると見らるるものであり、之を表情の有用性と言ふのである。又曾て有用であつた情緒

の表現が類似の情緒に移動する場合がある。例へば人が冷笑する時に齒を現はすのは、動物が争鬪する時に齒を出したその動作の痕跡であつて、人間は最早齒を出してかみ合ふ必要はないけれども、恰も動物が咬合ふ時と同じ感をおこす爲に同じ表情をなすものと考へられるのであり、之を表情の移動性と言ふ。表情は又情緒が快である時と、不快な時に於て反對な状態を呈するものである。快なる時は胸を張り頭をあげ、積極的な状態となるものであるが、不快な時は頭は前に傾き、血行も悪く胸廓は縮少し、所謂消極的な態度となるのであり、之を表情の反對性と言ふのである。この點から論ずると表情遊戯及童謡遊戯と言ふものは内界に快なる感情をおこさしめ、之を身體運動(體育的)として表現せしむるもので、教材の情的効果發揚に大なる價值あるものと言ふことが出来る。

d、表情遊戯及童謡遊戯に關する觀念

表情遊戯も童謡遊戯もその本質に於ては律を主とするものであつて、この律に依つて歌詞、所謂觀念を呼びおこし、この觀念相互の關係から出來た感情と云ふものを、身體運動として表現する上に於て同一である。表情は表情遊戯のみでなく童

謡にも含まれてゐる。只、表情遊戯及童謡遊戯の差異はその適用の範圍を異にするのみと思ふ。即ち表情遊戯は各學年共通の教材であるが、童謡遊戯といふものは専ら低學年に適用さるべきところの教材である。それで童謡と高學年の表情遊戯と言ふものを強いて區別しやうとしたならば、その表現すべき觀念の多少にあると言へるであらふ。體育上の著作に或は表情遊戯とか童謡といふ様な名目を附してあるが、之は根本的の差異による命名の仕方ではなく、只著作の方便に過ぎない。考へてよい。余は以上從來の體育そのものが肉體的の向上にのみ腐心し、吾人の精神作用が如何に肉體に影響するかを等閑に附した、即ち體育の實際的方面に於ける心理的の缺陷を認め、この缺陷を補正し、今少し心理的に立脚せる教授方法の現時の體育問題中最も重用なることを感するのである。而してこの教法を案出せんとするには、體育各教材の特質及缺陷を明らかにし、之より思考探究取捨選擇以てその理想を實現すべきものであると思ふ。之余が本章に於て體育の教材に就きて説明した理由である。さてかく各教材の特質缺陷を明らかにした後におこるべき問題は、何であるか、曰く從來の體育科教授法の缺陷を明らかに表示指摘

してその缺陷を補正研究することであらねばならぬ。

第二章 從來體操科教授法の缺陷

第一節 心理的缺陷

余は教法研究の第一歩として、從來の體操教授の方法に如何なる根本的な缺陷あるかについて闡明し、而して各教材の任務の那邊に存するかを問ひ、連絡補正以て理想的の教授法として改善することの大切なるを思ふのである。從來體操科教授の最大缺陷は、教法そのものに心理的缺陷の存在することである。從來體操科教授に於ける主幹とする教材は體操であつて、時間の始めから終極に至るまでこの體操教材を主とし拘束的教授に一時間を終るの状態であつた。而してこの日も、亦この日も、第一週も第二週も同じような教授法の連続であつたのである。それで一寸考へて見ると、最も合理的であつてその擧ぐべき効果も甚だ大なる様に考へられたのであるが、又吾人は他の一面をも考察するの必要を見るものであ

る。從來の體操科の教授の主要教材は體操であつて、遊戯、競技の様な最も本能的にして然かも興味ある教材を、五分十分の豫定はとつてあつたが、その實際的方面に於てはそれすら實施されぬ状態であつた。換言すれば體操萬能時代であつたと云へる。之に反動として起つたのが體育上に於ける競技、ダンス、表情遊戯、童謡遊戯、律動教材の勃興である。然るに著者の遺憾とするところは、やはり本邦の體育は流行的にして動搖的少しの根據なく、そして永續的實施力に乏しいものと思ふ。實際にダンス、童謡等を兒童に實施して見ると、教師も兒童も興味を覺える、興味があるから之に没頭するのである。競技は人類の本能に立脚した教材であつて特に國際的であるから人が之に傾注して他を省みないのは當然と言はねばならぬ。實際實施して見ても面白のは本能的な教材である、從來の體操科の教材に飽いた時代に於て、かゝる興味的の教材に没頭して他を省みない、所謂ダンス、競技萬能時代の到來すると言ふことは明白なこと、言はねばならぬ。國家も體育の民衆化と言ふことについて努力してゐるが、その現時に於ける根本的教材となつてゐるものは競技である。民衆體育の徹底といふことには手段がある、競技を以て

一般民衆に對して、一の體育的の刺激を興えるといふ意味であつたとすれば賛成の出來ることであるが、之を以て民衆體育の根本的教材と言ふことについては不賛成である。而して余程體育に關する自覺心のあるものでないと終にかゝる萬能主義に走り易い。女學校に於てはダンスあつて體操なく、中學校、高等學校の體育教材として競技あつて體操あるを知らざるの状態となり易い、之れ體操萬能時代に對する反動である。即ちかゝる教材あるが故に之を兒童に課すると言ふ體育の状態であつて、かゝる兒童の状態なるが故にかゝる教材を實施すべきであると言ふ態度ではない。實に主客轉倒の體育時代と言はねばならぬ。ダンス、競技の體育的價値は、只それ自身の擧ぐるところの効果と言ふもの、他に、體育各教材との連絡關係を研究し補正結合し、而して該教材そのものの體育上の使命を明らかにすることに依つて、眞の價値は發揮さるべきものであることを信するものである。實際従來の教法は心理的の缺陷が多い、即ち體操科の教授は拘束的にして彼等の自由活動なく従つて興味の存することがなかつた。故に著者は云ふ、體操教授中に配當する遊戯教材の生命は、一は該教材に依つて得らるる直接的な効果

もあるが、最も肝要なる部分は意思的運動に努力した緊張的身心の状態を調節し、教授そのものに一の變化を興え、興味を喚起し、著者の言ふ情的効果を發揮するところに存すると思ふものである。緊張弛緩は興味の條件である。この二者を交代させ以て變化を附し、興味を喚起することは、現今に於て特に直接的の效果以上重大なことであらねばならないと思ふ。興味ないところに快情の發動なく、又余程自覺したものでないと發動的に活動するものでない、學校教育に於ける被教育者の大部分はかゝる自覺の域に達したものである。之體操科教授に於て興味及快情の發動を要求せねばならない理由である。何となれば精神的に苦痛を感ぜしめながら、理想的の教材を實施するもその効果の半を減ずるものであると言ふことは實驗心理學上に證明されてゐることである。而し反對論者は言ふであらふ、従來の教授内にも幾多の變化をもつてゐるではないかと、實際變化は生理的にも解剖的にも心理的にも存在することはある。而しかゝる變化にては精神上興味と快情を喚起する原因となることは出來ぬことを經驗もし、亦思考もする。故にかく變化なくして興味に乏しい教程を反復する時は、従來の教程中に存する

解剖的の小變化の様なものは體育上一般的に快情興味を附與するとこの原因となることは出来ないものと言つてよい。かゝる教法を反復する時は教師も彼等も體育そのものに倦怠を生じ、自發的活動を要求する様なことは到底不可能であると信するものである。之從來の體操科教授が科學的にして身體的價値の大であるかの様に感じられてゐたが、その心理的方面の缺陷に依つてその効果の半を減じたものであると言ふのである。特にこの心理に立脚しない教法を採用し難いのは、いまだ自覺の域に達してゐない幼學年の體育教授に於て然りである。

第二節 現代の體育教材と從來の教法衝突

一、時間的の衝突

ダンス、表情遊戲の教材に於て、從來の教法と衝突するものは時間的に見て多くの時間を要するものである。それでその重なる教材は複雑な教材と言ふことになるのである。簡單な教材は從來の教法とさまで衝突なくして跳躍運動の部に於て之を代用して何等差支えない。而し今のこの種の教材の中には從來の教材

に比して甚だ複雑してゐるものが多くある。かゝる教材になると從來の教法のままにては不都合を來すことが大分多い。本教材は之より收得する直接的體育價値のみではなく、被教育者の思想感情を陶冶すると言ふ様な間接的の目的を有つてゐる。順序複雑にして然かも感情の陶冶を主とする教材に於ては、到底從來の教法の様に跳躍運動等に代用しても時間的に不足を生じその目的を達することは出来ない。競争遊戲は人間の競争の本能及び争闘の本能に立脚したものであつて、彼等の最も愉快に、最も自發的に實演するところのものであるが、現今では童謡遊戲、ダンスの研究は極めて盛んであるが、この競争遊戲の研究は至つて等閑に附してゐる。之は一の不可思議な現象と言つてよい。余は本遊戲は童謡踊どかダンス等より以上、體育上よりながめて重要な教材ではないかと思ふものである。さてこの競争遊戲を實施するに當つてその簡單なものになると、五分か、一分にしてその目的を達することか出来るから、從來體操教授の跳躍運動の部に挿入して差支ないが、一寸準備も必要であるし、又その方法の複雑なものになると、これ位の時間に於てはその目的は達せられぬ。特に複雑にして技術的なものに

なると尙更のことである。前述の通り體育上最も大切なるは教授時間中、被教育者に活動に關する快感と言ふものを味はしむることである。何より教授時間後に於て彼等の満足と喜びの印象を残す様な運動を実施することは大切なことであらふ。元より規律的な訓練も教師の人格とその徹底的な実施に對しては彼等は満足之感を生ずるもので、之を努力の快感といふのである。この努力の感とそして活動に關する快感といふものを與えると言ふことは體操科教授に於て最も緊要なことである。之はダンスの社會的意義のところて説明した様な方面から考へて見ると、實に兒童訓育問題等と密接な關係を有することが明らかとなるであらふ。體操は合理的、そして科學的のもので、體育教材中の權威であるが、この活動に關する快感といふものを惹起することは困難である。それで、之がためには本能的な教材にしてしかも活動的自由的である競争遊戯は適材であると言はねばなるまい。而し複雑な競争遊戯になると、一〇分、五分にしてその運動そのものに對して快感を覺えしむることは困難で、本教材の一、二回の實施のみで快情の發動を望むことは不可能な問題であると言はねばならぬ。故にかく體育上重要な任

務をもつてゐる教材も、従来教法のまゝにては適用上大なる困難を生ずるから、ここに一方法を講ずべき必要を見るのである。又競技の實施についても同様の感がある。従来教法に挿入せんとするには是非跳躍運動の部に實施すべきである。その理由は最早論するまでもあるまい。而して競技は特別な技術を要し且つその服装等に於ても競技獨得の服装の必要であると言ふことは誰れしもが肯定され得ることである。勿論吾々は走高跳を運動靴のまま運動服のまゝにて實施される。が然し之は不合理で競技そのものの本質に反した教法と言はねばならぬ。之は後章で述べることにするが、結極競技にても五分十分にして、その目的とそしてかゝる教材を採用した任務を思ふ通りに遂行することは出来ない。かく現代體育教材中に於て従來の教法との間に時間的の衝突ある部分を發見するものである。

二、二教材の本質と従来教法の衝突

A、ダンス表情遊戯、童謡遊戯の教調

知的學科の教授の方法と技能的學科の教授法とはその趣を異にしてゐる。知

的學科の教授に於ても、國語の教授法と數學の教授法とは全々異なるものであると同様に、技能科に屬する繪畫教授と體育科教授法とは全々同一ではない、それであるから體育科に於ても特別な目的(體育一般より見たる任務)と性質を有する教材の取扱上には各場合に於て異なるものであらねばならない。體操を主として教授する場合と體操教授に童謡遊戯を挿入する場合の指導者の考へと言ふものは全々異ならねばならない。右の様に各場合に於て生ずる教授の趣をば、教調と命名したのである。ダンスや競技は全身の運動であるから、體育教授の全身運動の部に代用すれば可であると言ふ様な簡單なものでもない、ダンス、表情遊戯、童謡遊戯は體育の直接的價值以外(身體的價值)人間の感情を陶冶すると言ふ特別な任務をもつてゐる。又體操に於て善美な姿勢を養成すること、ダンスに於て教養される姿勢の美とは異なる、特にダンスの様なもの、律と感情を骨子とするものであるから號令的な拘束的な體操教授の場合とは異ならねばならぬ。而し情的な教材と言つてもニグロダンスとか一寸とした律動遊戯の様なもの、體操を教授する場合の教調とさまで異なるものではあるまいが、この情的教材の中に

は随分複雑にしてしかも高尚な感情とを豫定してあるものがある。かゝる教材を取り扱ふ教調と體操を取扱ふ教調とは全々異ならねばならぬことを信ずる、かゝる教材を體操の教授の跳躍運動等に代用することは時間的に見ても、又教材の本質上から見ても不合理であると言はねばならぬ。斯様な教材を適用せんとするには、準備運動からその趣を異にせねばならぬ、吾人は先づ教授の始めに於て環境の整理と言ふことの大切なるを知るのである、即ち運動場の整理、服裝の如何、氣候と教材との關係、かゝる環境が該教材と調和する時、感情の陶冶も可能であるし又その教材の有する任務をも達成することが出来るものである、運動服は土まみれ、身に汗を催し乍ら塵埃の多い運動場にては到底この目的を達することは出来ない。準備運動中行進を課するにもせよ、その歩法は該時間の教材の準備的の歩法でなくてはならぬ、歩兵操典に要求してある歩法を以て満足することは出来ない、又授業の始めから身體の局部より全身に科學的合理的に鍛練し身心共に疲勞に近づかんとする時、之を課するも情的教材の目的は達せられまい。若し體操を主とした教授時間にかゝる教材を跳躍運動に代用するとしたならば、それより一

層正式の跳躍か、若くは競争遊戯などの簡單なものを課した方が、餘程體育的である之を課する所以のものは如何なる點にあるかを想像せねばならぬ。その想像も只單に感情の陶冶といふ特有の目的を有するからであるとするのはいまだ徹底した考へではない。かゝる教材即ち本能的な教材を中心とした教法を採用して、體育科教授の心理的の缺陷を補充するの考へを有することが最も大切なことであると思ふ。之れ余の教法研究の一根底である。

B、複雑な競争遊戯の教調

簡單な競争遊戯は從來體操教授の中に挿入して實施してよい。而して技術的な複雑にして、運動に關する快感の惹起に、多くの時間を要するものについては、從來の教法を用ひては不合理である。それでかゝる教材を取扱ふ場合に、よしや體操教材の幾つかを實施せんとする時に於ても、その競争遊戯の性質等を考へて適當に加減するの要がある。故に吾々はかゝる教法を用ふる時この遊戯を適當に實施し、且つ體操教材を無視しない様な工夫を必要とする。此處に該教材適用に關する教調が生れ出るのである。又後章に於て述べる様に準備運動の概念に二つ

の方面がある、かゝる點に競争遊戯實施について特別の教調を生ずる理由である。

B、競技の教調

競技の本質は本能的な教材であると言ふことである。之が人為的な拘束的體操と其の趣を異にする所である。被教育者が興味と快情とを以て之に従事するのは自然と言はねばならぬ。而して本教材の投げる、跳ぶ、走るなどは本能的であるが、この跳ぶ、投げる、走る、と言ふことに人為的の規則を附して、更に競争と言ふ本能を利用してある點が面白いのである。それで競技の目的は高く跳ぶ、巾廣く跳ぶ、遠く投げる、即ちレコードがその主眼である。之は柔道の極意と同じく、自己の身心の勢力を最も合理的科學的に利用して、このレコードを作ると言ふことが、その實施上の主眼であり又生命である。或る人は言ふ、本技の主眼はレコードでなく精神の教養である、而して之は競技の主眼ではなくして、只競技指導に當つての教育的要求である。高く跳んでも高慢ならず、人に負けても羨望せず、競技を通じて人格の教養をはかれと言ふに過ぎない。勿論競技を以て體育教材として採用したそのものは、該教材が教育的教材即ち人格修養の教材であることを考慮し

た結果である。然し人格の内容から國民生活をこつて零となり、世界主義の内容から國家主義を引いて零となる様に競技と言ふものゝ概念からレコードと言ふものをとるならば競技の生命はない。本技指導の主眼はレコードでなくてはならない。故に本技指導には彼等自身を最も有利に利用させて、出來得る限りレコードの向上と言ふことを要求し、又他方面にあつては之を通じて人格修養の資料となさしめねばならぬ。かゝる特質をもつてゐる教材であるから、その實施指導に當つても従來の教法に挿入するのみにては駄目である。例へば走高跳は全身運動なるによつて、體操を主とした教授の跳躍運動に代用すべきであると言ふならば、之の本教材の本質を辨まへぬものゝ云ふべきことであらねばならぬ。故に走高跳の場合、最早彼等がその横木をめぐり助走に移つた時の身心状態はその高さを飛ぶに最も完全な状態でなくてはならない。又彼等の服裝に於ても彼等の全力を以て跳ぶ力を削減するところのものにては駄目である。時々體操教授の跳躍運動に代用するの心持にて、體操服運動靴のまゝ走高跳を實施してゐるのを見るが、あれは本教材の本質を知らないものゝなすところの思慮なき仕方であると評

するより他はない。時間の始めから體操を實施して、餘力なきまで全身を訓練した終りに於て、努力を要するところの本教材を實施するも、その目的を達することは出來ない。折角の興味ある教材もその特質を失ひ、且つ亦大きな目から眺めて、著者の言ふ本技の體育的使命を遂行することは不可能なことである。本技實施に關しては準備より終りの運動に至るまで、他の教材の取扱と全然異なり、體操中心教授の副材として實施する様な簡單なる教材ではない。之等は各教材の特質より想像することが出來ると思ふが、また各論に於て詳述することにする。

第三章 教授法の理想

第一節 自發的活動に就て

一、自發的活動の意義

一體人間の自發的な活動をすると言ふのは、如何なる根本的性質を有してゐるものであるかを明らかにすることは、自發的なそして活動的な教法を研究する上に大なる参考となるものである。今この自發的活動といふものに如何なる根本的な性質があるかを調べて見やう。

A、生物學的の説明

人間の自發心については萬有進化論及生物學的、心理學的の根據がある。生物學的に論ずるといふと、總ての生物と言ふものは自己發展の能力を有してゐる、その能力(ability)と言ふものは外部的條件に依つて發達したものでなく、生物自身の内部にこの發展の能力が遺傳的に存在するものであるとの説である。即ち吾

人の自己發展と言ふ能力はアメイバ以來積集された一大の勢力であるといふのである。そこで吾々はこの自發心と言ふものが人間の固有のものであつて、生物の自然的に有するところの勢力であるを考へられるものである。

B、進化論的の説明

進化と言ふことを宇宙的に考ふるなれば、發展と言ふのは生物にのみ限られるものでなく、萬有の間に行はれるものであると言つてよい。

換言すれば、自己發展といふこの能力と言ふものは、アメイバ以來の發展力のみでなく、電子以來の勢力の蓄積であるとも言へる、之、自發心の進化論的學説である。

C、心理的の説明

吾人はこの自發心と言ふものが、人間の生後外部的の條件に依つて發達するものでなく、先天的の勢力であることを知つた。而しかゝるアクティブ的な身心の状態が先天的に存在しても、之が人間生活上、重に如何なる方向に發動しつゝあるかを研究せねばならぬ。米國のモンテッソーリは、人間の他動物に異なる一つの特色は、人間に存在する自由活動、創作と言ふことである、この自由創作活動といふこ

とに人間の自發心を證明することが出来ると言つてゐる。今この自發心が活動する方面をその對象に依つて分つと次の通りになる。

- 1、巧利的見界に依る自發活動。
- 2、求知的慾望と自發活動。
- 3、活動そのものの満足と自發活動。
- 4、境遇の整理と自發活動。
- 5、自由と自發活動。
- 6、興味と自發活動。
- 7、本能と自發活動。
- 8、創作と自發活動。

二、自發的活動と體育

總て教授法の理想と言ふものは、被教育者の自發的活動を喚起するにあるものである。ヘルバート以來は、教授上興味と言ふことを尊重して來たものであるが、最近に至つて學習動機の尊重すべきものであるとか、或は創作教育、創造教育、自學

自習等の唱導される様になつたそのものは、被教育者の自發活動を要求すること、教授上に於て最も大切でなければならぬと言ふことを認めてゐるものと言つてよい。特にこの學習の動機と言ふものは、興味よりも一層根本的な概念で、それに價値の感を含む、この價値の感があつて、茲に努力の最高の形式を生ずるものである。故に教授に於てはこの學習の動機を喚起するの必要がある。而してこの動機は度々之を反復されて習慣となるもので、この學習の動機が習慣的になれば、茲に充分なる學習態度を生じ、教師の外部的な指導を待たずして、自學自習の實を現はすことが出来る。此の時被教育者の精神活動たるや、自發的の活動である。尙この自發的活動を善導して自覺的活動にまで導びくことが大切である。總ての被教育者がそのなすことを自覺して、自發的に活動する境涯こそ、教授法の理想であらふ。體育に於ても然り。從來體育の實際に見る様に何等體育そのものに自覺することなく、その活動が受動的であつては到底體育の目的を達することは不可能である。故に指導者は一層彼等の體育に關する自覺心を喚起し、體育そのものに對する眞剣な態度を養成し、彼等をして自發的になさしむる様指導すること

との大切なるを感ずるものである。従來の教法が専ら教師の爲の體操教授であつて、兒童自身のものでなかつたことは明らかなことである。

そこで、ある理想的の體育科教授法を案出しやうとするには、先づ自發的活動が自然的固有のものであるか、如何なる方面に現はれるか、之を如何に體育上に利用するかについて調べて見ることも大切な問題である。著者は自發心の心理的の根據について述べた各項をたどつて、自發活動の意義を今少し明白となし、而して體育科教授に於て彼等の自發的活動を喚起する、所謂體育科の理想的教授法建設に關して根據を固うせんとするものである。

1、巧利の見界と自發心
人間には一の慾求がある。この慾求を満足して行くところに人生の向上は存在する。之が價値の創造である。而してこの價値は理想に向つて創造されて行く必要がある、さてこの慾求の満足に向つては自發的になる。特にその慾求が物質的になると、之が満足を得んとして名譽生命をも捨てて活動するものであるが、之には體育との關係を見出すことは出来ないからここに筆をおく。

2、求知的慾求と自發活動

人は先天的に求知的慾求を持つてゐる。之は三四歳頃から言語の發達と共に質問の形式となつて現はれるもので、實際的に考ふるも知識の大切にして之を慾求することは萬人の通有性である。現今の階級といふものは知的階級、物質階級であるが、物質的に上位に立つにせよ、知力の必要なことは明白なことである。故に人間は知ることとを求むる、こゝには必然的に自發活動が存在する。知識の奥を極めんとするには、肉體的のエナヂーを必要とすることは心身相關の理に依つて證明されるところのものである。故に教育者はかゝる人間の慾求を利用して、體育をして自發的、自覺的ならしめる方便として、應用する手腕を有せねばならぬ。かゝる手腕が體育指導者の眞の手腕であらねばならない。

3、活動そのもの満足と自發活動
心理上命の感といふものがある。一度快感を覺えた活動に對しては再び之をなさんと心理的の傾向を生ずるものである。此の時の心理状態は自發的である。之體育上最も注意すべく又必要な點である。一時間の授業中彼等に何

等かの印象を残すところの満足な運動を課するときは、彼等は再び之を行はんとする状態となり、運動を棄避する様なことはない。彼等は規律的運動に對しても其の教法が徹底的であれば、快感を覺ゆるものである。之は努力の感である。現今體育教授の缺陷は、只肉の合理的訓練に没頭して、一定不變の興味なき自由なき教法を用ひ、以て兒童の心理に合する教法を用ひなかつたがためである。故に吾人は一時間の授業中、特に彼等に満足を与える様な運動の一二を實施するの必要を認めるものである。肉及精神を合理的、科學的に訓練せんとする教法は一定年齢に達し、自覺的に活動する時代の教法としては可ならんも、幼學年に於てかゝる教法をとるのは、教法上に於ける不合理體育と言はねばならぬ。之余が教法研究に當り、競技、遊戯、リズム、カール運動を採用して、體育上の多覺的方法をとる所以である。

其之に最も必要なものは、器械器具の設備の完全であらねばならぬことである。教師より云つたならば、この器械器具の不完備によつて、意のまゝな教法の實施されない場合は屢あるものであるが、是等の完備及其他運動場の完備せる場合、又は

體育館の建設、身體検査の結果まで整然たるとき、この環境におかれた彼教育者の心中には、ある體育に關する好機心を喚起し、終に之が教授上最も大切な學習の動機となり、常に彼等をして體育精神の持主とすることが出來得るものである。之は知的教科の教授に於ても同様なるもので、彼等の活動を自發的にしやうとするには、かゝる微細なる點をも注意することが肝要である。

現代の教育に於て最も尊重せねばならぬことは、個性と言ふことである。それで個性を無視した體育と言ふものは、恰んど價值なきものと言つてよい。特にそれが團體教授に於ては見逃す可らざる重要な點であると思ふ。而してこの個性は、彼等の自由活動の中にて最も観察し易いものである。この自由のないところに人間の自發的活動の存在することはない、拘束的なところに自發的活動なきは明らかなることである。從來體操教授と言へば、意志的拘束的運動がその過半を占め、彼等の自由的な活動を尊重することが至つて少ない、自由的な活動である遊戯教材の様なもの、時間の終りに單なる附加物として課されてゐた觀がある。斯

様な教法のみをとることは、余程體育そのものに自覚あるものに適用すべきところの教法であつて、發達の中途にある兒童に採用すべき教法ではない。著者はダニスの理論に於て美的感情の存するところ、その生活は美化されるものであることを言つた、實際學年の進むに従つて彼等の精神的負擔は過重である。特に中等學校以上に於てはその感を深うするものである。學校生活に於て彼等の自由的な活動はいづくにあるか、此の點より考察する時、一時間の體操科の教授時間と言ふものは、彼等の爲に、又學校訓練と言ふ方面より眺めて、重大な使命を有するものと言はねばなるまい。彼等の感情は荒み且つ壓迫されつゝある、之を發散せしめある慰安を與えることは體育教師の任務である。而してこの荒みたる感情を満足せしむるとき、如何にそれが學校訓練を良好ならしむることであらふか、その反對なる場合、如何に惡結果が學校訓練上に惹起せらるゝかは、勿論推測することが出来ることであらふ。於此彼等の壓迫的な感情を發散せしめ、以て彼等に一大の慰安を與えると言ふ様な考へは、體育科教授中に考慮すべきものであることを信ずる。之著者が可成的彼等に自由の活動を與えんとして、興味ある心理的教材を

從來より以上に重要視する所以である。而して反對論者は言ふであらふ、體育は之體育にして、被教育者の慰安物にあらずと。而して之は淺薄なる考のみ、即ち論者は著者の言ふ體育上の情的効果を忘却せるものであつて、又被教育者のかゝる傾向を利用して、之を善導することが教育上大切なことであることに氣附かないからである。

6、興味と體育

興味のないところに自發的の活動はない。興味は變化を要するものである。興味のあるところに快情は存在する。この興味快情の缺乏と言ふことが、從來體育科教授法の缺陷である。故にこの一大缺陷に着目して、今一層進歩した教法を研究したならば、尙體育の効果を向上することが出来るものである。而して體育を興味化するに當つて、最も注意を要することは、體育をして所謂娛樂的となさないうことである。換言すれば面白半分と言ふ様な體育となさないうことである。その教法は勿論、心理、解剖、生理、教育的に批判して、少しも缺點のない教法でなければならぬ。而してその興味的な體育は眞の自覺的體育に進む一の階程と見なければ

ばならぬ。堅實なグリークの體育を繼承したローマ體育を見よ。ローマはあれ程理想的であつて、堅實な體育を受けたに關らず、終に面白半分の體育と化し、神聖なグリーク體育をして、人類獸類の争闘となし、延いて飲酒享樂的と化し、道徳は廢退し、自國を悲運に陥らしめたではないか。それで吾々は體育そのもの、目的を自覺し、各教材の配合選擇を合理的に工夫し、從來の教法より一層興味ある變化ある、そして從來以上の價値を發揮すべき教法の案出に腐心せねばならぬ。

7、本能と體育

本能運動は快情を伴ひ、且亦自然的に遂行されるものであると言ふことは、教材論に於て詳細に説明し、その體育的價値及使命についても述べたところである。實際從來教法の缺陷を償はんするには、本能的教材の利用如何にありと言つてよからふ。

8、創作と自發活動

あまり體育に關係なきを以て省略する。

9、結論

自發的活動は上述の如く、先天的のものであるが、之が發動する方向は、前に述べた通りである。故に吾々の教授の理想は、自學自習の習慣の養成、換言すれば學習態度の確立即ち自發的活動である。故に體育に於ても自發心の活動する標的、即ち興味、自由等上に述べた様な場合を根據として、教法の研究をなすの必要を見る。而して自發活動は、自覺の場合、及無意識の場合とがある。幼學年に於ては、無意識的なるを要求すべく、體操教授の理想は、自覺的自發活動にあらねばならぬ。尙體育の理想は各人の信念であると言へる。幼學年に於ける、無意識的の自發活動は、自覺的自發活動の境涯に到達する迄の階段と見て差支ない。

第四章 教授法の一般的説明

第一節 従來教法改善に關する意見の總括

従來の教法に心理的の缺陷の存することは、屢之を述べた。又人も感じ經驗もするところである。故に體操を主とする教法の中、跳躍運動に競技を加味し、或はダンスを加味してゐるものもある實況を現出してゐる。勿論簡單な競技、競争遊技、ダンスの様なものは、その方法にて可ならんも、總ての教材にかかる教法を用ゆると言ふことは理論上誤つてゐる。此處にある方法を案出せねばならぬ、この教法を案出する事實そのものが、體育全般に興味の附加となり、無味乾燥にして、しかも實施に於て持続力なき體育をして、改善することを得るものであることを確信するものである。體育をして今少し興味を興へ、而して被教育者の自發的活動をひきおこすことが現今體育研究の一大問題である。之余が教法研究に先だち、自發心について詳述した理由である。その自發活動の存在するところは自由、本能

活動そのものの満足、智的慾求興味、の存するところにある。それであるから、吾々は之を根據とし、興味あり快味ある教法を研究して、以て被教育者の活動をして自發的ならしめ、尙智的に向上するに従ひ、自發的活動にまで指導するの必要がある。教授法の理想は被教育者の自發的活動の誘發にあるが、被教育者の過半には之を要求することの出来ない状態であるから、吾々は漸進的にその境涯まで到達する覺悟がなくてはならぬ。さて余はこの理想を少くとも實現するために、教材としては従來の時間の衝突、體操萬能によつて輕視されてゐた、本能的教材(競技、ダンス、表情遊戯、童踊、競争遊技)の採用を重視せんとするものである。本教材は最も自由的にして興味あり、又活動そのものに關する快感を惹起せしむるに、適材たることは、其の特質に於て述べた通りである。而して本教材を時間的にも、又分量的にも従來より多く採用し、以て體操教材との合理的連絡結合をはかつたならば、自發的な快ある興味的な體育として、少しにても改造することが出来るもので、従來教法の心理的缺陷を救済することを得るものである。換言すれば、體育上多覺的方法を應用するに於て、之は従來の教法は千遍一律にして一定の形式である體操

の實施であつた、それ故興味もなく、快なる教法でなかつたのであるから、香々の體育科の教授は尙一層心理の法則に従ひ、或は人間の本能を利用し、各教材の連絡、結合を工夫して、變化を附與し、興味ある教法とすることが大切である。即ち多くの感覺を利用して、(視覺、聽覺が重なるもの)刺激を中樞に傳へる方法で、體操時間中、行進の場合に音曲を用ひ、喇叭を吹奏し、又は歌ひ乍ら行進せしむるが如きは之である。さらに、余はその本能的の教材中、リズムミカル教材及競技を採用せんとするものである。かの輕體操(ワンス、棍棒、半輪等)の様なものも、現今體育の教材としてはあまりに價值なきものとして、放棄されつゝあるも、體育上一の心理的缺陷の補充と言ふ意味よりすれば、いまだ生命あるべきもので、要は指導者の適用如何にあるのである。然し既に述べた様に従來教法は心理的の缺陷を有し、且つ時間的に、又教材の本質的に衝突がある。之を救済せんとして、本質的に異なる教材を、體操を主とする教授中に挿入して、その目的を達せんとすることは、その要求のあまりに大なるを見る。之余が各教材の連絡結合を研究し、以て第二編に於ける教法を提出した理由である。之とても理想的とは言へぬ、幾多實際に於て理論に於て不備な

る點あるを信ず、元より讀者の研究の一參考として發表したるに過ぎないものである。

第二節 教法の二方面

一、體操中心教授法(科學的拘束的教材を主とせる教法)

A、體操中心教授法の意義

従來の教授法は體操を主とし、其の附帶物として教練及簡單な遊戲を實施したものである。箇様に従來教法が體操を尊重したと言ふことについては、大に意義のあるところなのである。どうしても體育教材中に於ける權威のあるものは體操でなくてはならぬ、體操を無視した教法は何等とるところのないものと言つてよい、このことは如何なる教法を案出するも深く注意を要すべき問題で、このことは教材の特質の部に於て述べた通りである。従來の體操教授は肉體を科學的に合理的に意識的に訓練すると言ふ點に於ては理想的なものであるが、拘束的にして興味なく、著者の言ふ情的效果を發揚するに特長ある教法ではない。然し又體

育と云ふものは一定の目的ある具案ある教育的動作であるから、その總てが面白く遂行されるところのものでもない。面白くなくとも彼等の現在に於て又將來に於て有用なものは實施せねばならないが、斯様な被教育者の自覺的自發活動を要求する様な性質の教授法は幼稚な兒童等には適用されないであらふ。それを之を適用すべきところには適用し、加減を要するところには加減するの必要がある。從來の體操教授には種々の缺陷が存在するが、どうしても體育教材の主幹である體操を中心とした教授であるから、體育教授としては見のがすことの出來ない教法である。之を著者は體操中心教授法と言ふのである。

B、教 調

體操中心教授法は前述の通り體操教練、簡單な遊戯、童謡遊戯、表情遊戯を省くを實施するものであつて、この教法の他の教法に比較して特色とするところは、肉體の合理的訓練といふことが重なるものである。而して拘束的な體操を主とするから、従つて彼等の意志を積極的に訓練して、意思を強固となすことが出來、又規律的精神を固め訓練的の効果を擧ぐるに適切なるものである。故に本教授の教調は

規律的にして努力的、流汗鍛練的で一貫せねばならないものである。然し吾々はここに本教法の光明を認めねばならぬ、それは元來吾々は本能的のものに快感を覺えたり、又自由なものに好感と興味を惹起するばかりではなく、努力的拘束的なことにもそれを感じるものであると云ふことである。教師の嚴然とした人格と、堅確な決心と、そして熱誠とを以て一貫するときには、被教者は指揮者の熱誠に導かれて拘束的規律的の仕事を行つて努力を生じ、且つ亦之を遂行した時、その努力の後をかへり見て、一大の生氣ある快感所謂努力の快感を生ずるものである。この努力の感を生せしむることが、本教法に於て最も大切なところである。即ち本教授法に努力すればする程、他のリズムミカル教材競技を主とする教法も尙一層興味的眞劍的のものとなるもので、之は心理學上から説明されるところのものであらう。それで各教授法を提供するそのものが、只從來教法改善と云ふ淺い意味を有するばかりでなく、各教授法相互關係の上に現はれる價值を吾々は最も尊重せねばならない、一言に云へば本教法は拘束的、努力的の教調であつて、心理的に一努力の快感を興える様な指導と言ふものが大切なことである。ここに本教授

法と云ふものが、今日まで如何なる有様で實施されてゐたかと言ふ實際を觀察して見る。即かゝる意志的努力的な教調をもつてゐる教法であるから、之を日々反復することは餘程自覺の域に進んだ人でも甚だ困難なことである。故にこの教法のみをとつてゐた從來の體育の實際と云ふものは、如何にも持續的實行力に乏しかつたのである。之は當然なことであらふ。それでまづ一時間一通りの運動は形式的に實施したのであるが、この教法に於て要求する積極的規律的訓練の様なものは全然駄目であつたと言ふことは、從來中等學校に於て實施して來た教練の實際を見ても明らかなことである。於之著者の提唱する教法では、この拘束的な從來體操教授所謂體操中心教法も努力すればする程、他の教法との調和的關係によつて、體育上一の變化の附與及興味、誘發を促し、體操の實際をして今一段と興味の持續的になすことに努めたのである。兎に角本教法の教調は努力、規律的而してそれが徹底的な教法でなくてはならない、この教法は努力すればする程、本教授の生命を尙生かすこととなるものである。所謂體操を生せと云ふことは、余の教法全體を一貫してゐる思想であると云ふことは再三反復したところである。

○、體操中心教授法の教程

之は從來體操教授法と同一なものであるが詳細は後編の教案参照せられたし。

1 準備運動 (Warming up)

下肢 (leg exercise)

頭 (Head exercise)

上肢 (An arm exercise)

2 主運動 (general exercise)

胸 (arch flexion)

懸垂 (Heaving exercise)

平均 (Balancing exercise)

脊 (Dorsal exercise)

軀幹 (lateral exercise)

腹 (abdominal exercise)

跳躍或は簡單な遊戯 (leaping exercise)

3 終りの運動 (final exercise)

下肢 (Leg exercise)

教練

呼吸 (Breathing exercise)

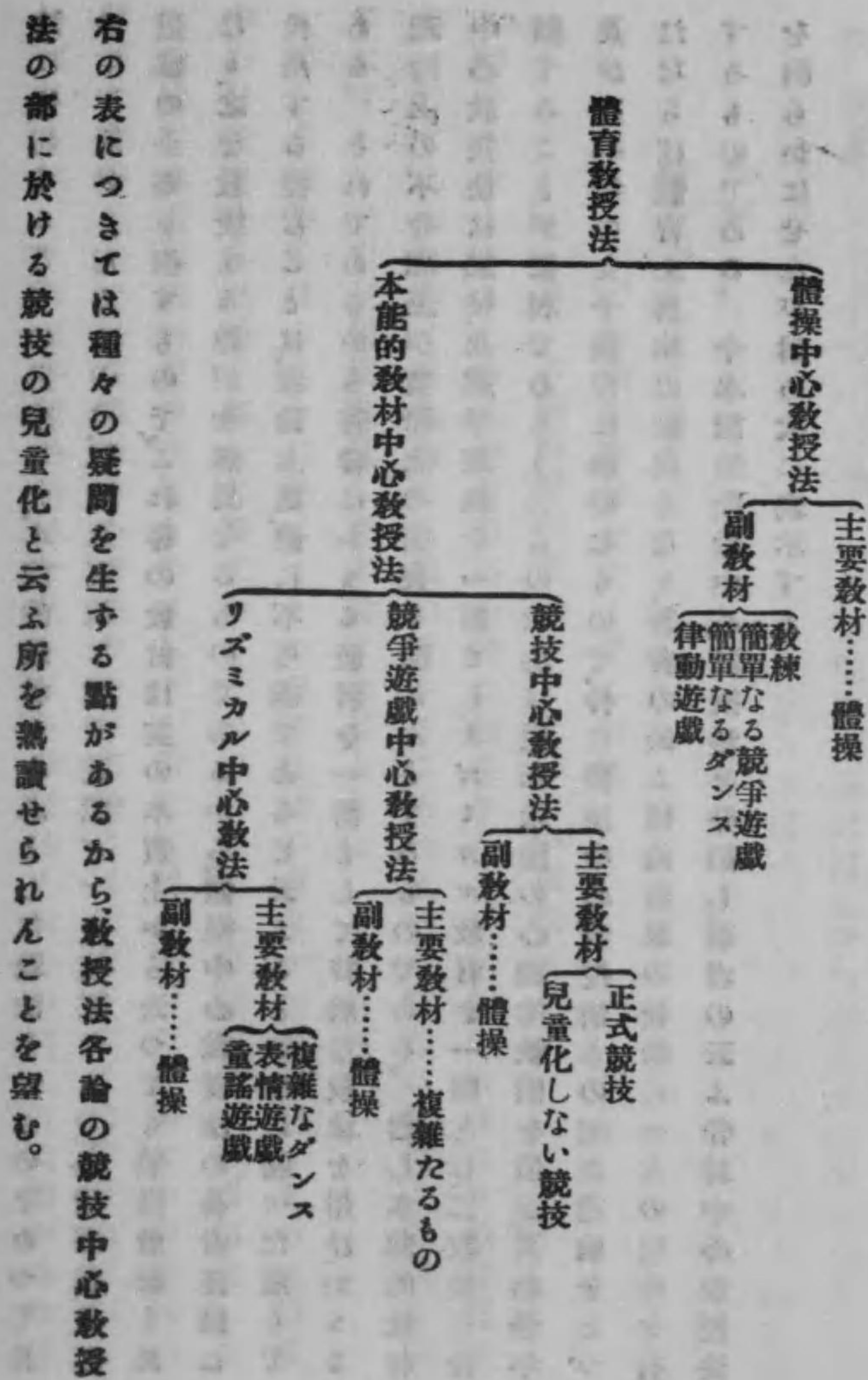
二、本能的教材を主とする教法

A、本能的教材を主とする教法の意義

體操教練と言ふものは拘束的努力的の教法であるが、本能的教材はその特質の部に於て述べた様に、自然的に人間の行ふところの運動で、彼等は愉快と興味を以てなすもので、之が體操教練と根本的に相異あるところである。

然し本能的教材のうち、に於ても、その簡単な競争遊戯、ダンスの様なものは、體操中心教授の全身運動の部に代用することが出来るから問題は無いが、複雑化したもの或は表情、童謡遊戯の様なものになると、前章に於て述べた教調とか時間的問題を理由として、到底體操中心教授の全身運動に代用することは不可能であらねばならぬ。それで本能的教材を主とする教授法と云ふのは、この體操中心教授

法に代用することの出来ない、本能的教材を中心とした教法を云ふのであつて、其の主要教材となるものは、競技及複雑な競争遊戯、ダンス(複雑なもの)表情遊戯、童謡遊戯の全部を指すもので、これ等の教材は其の本質上から云つても、體操教練と異なり、之を教授する趣が全然異なるものであるから、體操中心教授法の全身運動に代用する様なことは、理論上絶體に不可能であると云ふことは前に述べた通りである。それであるから、著者はかゝる教材を一團として特別な教法を用ひ、かゝる理論上の不合理及び實際上の衝突を除かんとするものである。然し本能的教材中心教授法は、競技及競争遊戯を一團とし、リズムミカル教材を一團とし、二教法に分類することが便利であらう。この教法は従來教法の心理的缺陷を償ひ、又幼學年及び高學年の女子體育に必要なもので、特に體操中心教授法との配合連絡をとつたならば、體育上興味、附與となり、著者の云ふ情的效果の發揚に一大の生命を有するものである。今本能的教材中心教授法を分類し、著者の云ふ各材中心教授法を明らかにせんが爲め次に表示する。



右の表につきましては種々の疑問を生ずる點があるから、教授法各論の競技中心教授法の部に於ける競技の兒童化と云ふ所を熟讀せられんことを望む。

B、リズムミカル中心教授法

1、教 調

體操を中心とする教法は、體育の最高權威である。然しこれを日々反覆する時は無興味なものとなつて持續力がなく、又一方には現代の體育教材の中には従來の教法中に實施する時は、理論的に不合理を來たし活用の出來ないものもある。又活用したとしても、充分教材の眞價を發揮することは困難である。複雑なリズムミカル運動の中には、到底體操を主とする教法中に挿入することは、如何なる點より見るも困難なるものがある。故に著者は複雑なる本教材をば一團として、リズムミカル中心教法を提供した所以である。この教法を研究して行けば、現代體育上諸種の疑問點を解決し、且つ體育をして親しみ易くなし、従來體育よりも審美的にして、而も價値の多いものとなすことが出来るものと思ふのである。然しこの教法を提供した理由と云ふものは、右の外に體操中心教授の心理的缺陷を補ひ、且つ其の實施をば持續的ならしめると云ふ考へに出たものである。例へば一週三時間間の授業ありと假定して、第一時目は體操中心教法を用ひ、第二時目にリズムミカル

教材中心教法をとり、第三時目には體操中心を採用し、次週に於ては第一時目を競技中心をとり、第二時目に體操中心を採用し、第三時目に遊戯中心を探る様に反復したならば、被教育者は其の變化及び本能的教材の實施に依つて、多大の興味と快情を感ずるであらう。而して彼等は自然に體育そのものに興味を感じ、意志的拘束的な體操中心教授にも努力する様になる。かやうに體操を生かす點に本教授の使命は存するもので、本能的教材中心教授の價値は、これより收得する直接的の價値のみでなく、更に體操を生かすと云ふ點にあるのであるから、指導者はよく其の點に注意せねばならぬ。而してリズムミカル教材中心教授法の主要教材は、リズムを本質とするものであるから、意志的訓練的な努力的な體操を主とする教法とは本質的に差異あるもので、これを取扱ふ教調を異にするものである。本教授の教調を概括的に云つたならば、體操が主意的の教調なるに反して、情を根本とする教調である。それで凡て運動を美的に取扱ふ必要がある、換言すれば本教材が包含する感情及び動作に融合する教法をさねばならぬ。例へば行進運動にせよ、歩兵操典に要求してある歩法をどることは不適當である、それでかゝる場合には

歩法と云へども審美的に指導する必要がある。それで本教授の教調はすべて該時間に配當された、主要教材の感情に融合した審美的教法を用ひ、而して本教材の眞の價値を發揮することに努めねばならぬ。

リズムミカル中心教授法の教程

イ、準備運動

教材としては體操及び既習のリズムミカル教材を實施する場合が多い、然しこれ等は皆、本時の主要教材と融合することが大切で、特に注意すべきことは、體操中心教授法の主運動が、本教授法の準備運動中に包含されると云ふことであるが、其の理由は、教授法各論に於て述べる事にする。さて準備運動中に體操教材を實施するにせよ、其の取扱ひは本時の主要教材に連絡する様指導し、本時の主要教材に對する特殊の學習準備の目的を達することが大切である。それで歩法の練習も音樂的に實施するの必要があらうし、又上肢運動はダンスの準備運動として實施することも肝要である。結局、準備運動に如何なる教材を採用するにしても、本時の主要教材を眺めて審美的に、又其の主要教材の價値を充分に發揮する助けとなる様

に指導すると云ふことは大切である、これ體操中心教授法の準備運動と異なる所である。故に教練の様な意志的な拘束的な教材を採用せず、情的審美的な教材を採用すると云ふことが緊要な問題である。然し體操の様な努力的教材でも、指導者の研究に依つて審美化して實施することを得るものであるが、其の具體案に就ては教授法各論に譲るものである。

ロ、主運動

主運動にあつては、本時間配置された主要な情的教材の實施である。體操を中心とする教授に於ては前述の如く時間の都合上、複雑なリズムカル教材は到底實施されぬから、複雑なるものは本教授に採用し多くの時間をとつてこの教材に對する快味を感せしむるがよい、然し茲に最も吾人が注意を要することは、情的教材は一般的に局部的訓練と、矯正的の價值に乏しい、凡そ人間は只現在の身體を其のままに持續するのみにては駄目である。即身體上不正な型等は、充分矯正して改善しなければならぬが、情的教材にはこの特長がない、又人間生活として最も緊要なる身體の部分は常に其の部分に最も合理的な教材をもつて訓練せねばならぬ。

例せば女子一生涯を見て、體育的に重要なる身體の部分は、腹及び胸であるが、この部分の訓練と云ふものは日々怠つてはならないであらう。それで情的教材を主とする教法に於ても、この重要な部の教材の實施と云ふことは等閑に附すべきではない。然らば如何なる教程の部分に於て課すかが問題であるが、これは後に述べる教授の原則に依つて決定すべきものである。余はこれを準備運動(體操中心教授に於ける)より本時の目的とする主要教材に移る中間に課すべきものと思ふ。そしてこの重要教材實施迄を、リズムカル中心教授法の準備運動とするものである。本教授法が主要教材の價值を充分に發揮すると云ふ所に、其の生命は存するものであるから、主運動には充分の時間をとり、綿密な指導をすると云ふことが大切である。情的教材の本質として、曲と身體の動作と感情の融合した時、この教材に對する快感を覚え、其の目的は達せらる。要するに充分なる時間と、審美的指導を以て彼等に本教材の眞の快情を味はしめねばならぬ。

ハ、終りの運動

本時間情的教材に依つて陥つた精神的肉體的缺陷を補充し、且つ心身を平靜に

復する事が終りの運動の任務である。

〇、競技中心教授法

1、競技中心教授法の意義

この教法は、競技が體育教材中特別な本質をもつてゐるから、之を従来までの體操教授中に適用すると言ふことは、理論的に、又實際的に不都合を來すものであるから、競技を中心として特別な取扱となす所以のものである。

2、教 調

競技及競争遊戯は、人間の本能を教育的具案的となした教材で被教育者の最も好愛するところのものである。而して競争遊戯中心教法の教調と云ふものは、競技中心教法の教調を解くことに依つて大體了解の出來ることゝ思ふから、これから述べる競技中心教法の教調につき詳しく吟味して欲しい。さて體操が主意的であり、努力的のものであるのに反して、リズムミカル教材は審美的情的の教材であり、競技は實に活動的、鍛練的教材と言ふことが出來るであらふ。又本教材が實施される方面から考察すると、リズムミカル教材及體操教材は團體的に實施されるが、

競技の實際を見ると、その準備運動位は團體的であるが、其他の主なる動作は個人的になされるものである。競技が個人的であつて自發的、活動的の教材であると言ふことは前章に於て述べた。それで右の様な教材の本質とか、或は實際的方面から考へて、競技を取扱ふ教授の教調といふものは、體操中心教法等と確別な差あるを知るものである。その教調の如何なるものであるかは、競技に關する各論に至るまでの理論に於て了解してもらいたい。

3、教 程

イ、準備運動

競技のみでなく、リズムミカル教材中心教授法に於ても、この準備運動にあつて、二つの着眼點が存在する。このことは、従来教法の準備運動と比較して、特に注意することが大切である。一考せよ、従来教授法に於て、全身運動として採用した遊戯教材に對して、準備運動中之に對する特殊な準備と言ふ考へを以て實施したかを。進歩した現代の體育教材の複雑化を思ふ時、本教材の複雑にして高尚なるものを取扱ふに當つては、到底昔の様な準備運動と云ふ様な單純な考へにては實施するこ

とも出来ないし、又吾々はその教材の體育上大きな目から眺めた使命と言ふものを貫徹することは不可能であることを知るものである。著者は従来までの準備運動に關する觀念を一般誘導と言ひ、其他複雑なリズムカル教材等を取扱ふに當つて、この一般誘導と言ふものに他に着眼すべき重要な點を發見するものであるが、之を特殊的誘導と言ふのである。従来教授法の準備運動中に含まれる心理的の意義は、只單に運動といふものに精神を傾注せしむると言ふに過ぎなかつたが、複雑高尚な表情遊戯等を取扱ふ場合は、その傾注させる仕方が全々異なるものであつて、體操中心教授等と比較して考ふることの出来ないと思ふのである。例へば本時主要教材として、高尚優美な表情遊戯が配當されたとしたならば、彼等の身心を運動に順應せしむると言ふ他に、この遊戯教材の眞價を發揮せしむるための特殊的な準備も必要である。而して表情遊戯と言ふものに對する特殊的な學習の態度を樹立せねばならぬ。そうしないと稍もするとかゝる教材は兒童の娛樂物となり、却つて非體育的な教材となつてしまふものであることを注意しておく。かゝることは競技中心教授に於ても同様なことである。

ロ、主運動

この時は本時配當された競技の教材を充分の時間をとつて練習せしむる時である。然しリズムカル教材中心教授の部に於て説明したと同様に、競技は矯正的教材に乏しく、且つ時としては不正な姿勢に陥る様なこともある。それでこの重要な身體の局部は、特に訓練するの必要がある、その實施法及教程に於ける排列は、リズムカル中心教授に於て述べた通りである。

ハ、終りの運動

前教法同様であるが、特に競技實施中に於て陥つた非體育的の部分を矯正し、然る後一般正常な状態に復せしめておかねばならぬ。それ故この矯正法としての教材は、本時の主要教材を考へて、選擇するの必要がある。

第三節 各教授法の特徴

さて教法を二方面三部に分つたが而して之を適當に配當する時は次の様な特徴をもつてゐる。

- 一、複雑なる教材の(競技及リズム教材)時間的衝突を除去する。
- 二、本能的教材を多く採用するを以て、被教育者をして體育一般に對し變化と興味を興ふ。
- 三、本能的教材を多く採用するから、彼等の自由活動を多く且つ個性觀察の一方便にもなる。
- 四、各教材より來る教材の本質的の衝突をなすことなし。
- 五、從來の體操中心主義の教授は益々徹底的となり、鍛練拘束そのものが他の教法と關連して、體育上變化興味の附與の原因となる。

第四節 教授法の一般的注意

一、時間配當に就て
教法を如上の二方面三部に分類したが、最も體育的に教育的に重要視せねばならぬのは、體操を主とする教授時間ではなくてはならぬ。その理由は、吾人學校體育と言ふことを見て、その運動量より觀察し、或は合理的に身體各部を均整的に

向上せしむるに、最も良教材と言ふ點より觀察して、到底他の教材に比較すべきものがないからである。又教育と言ふ目的より見て、體育は體育としてそれ獨特の目的がある。而して教育は全然個人を主として行ふべきものなれども、教育の目的遂行の爲めには、或る部分は犠牲とせなければならぬ、假令兒童は自由に教育すべしとするも、他に社會團體のために規律的の訓練の必要もある、特に現代は國家的の要求として、又一般教育思潮として、この意志の訓練の必要を認める様になつてゐる。所謂主意主義の教育である。而してこの思潮より考察して、規律的な體操を主とする教法は實に好適材たる資格を失はぬもので、この點に關しては他の教法と比較することの出来ない特色を有すると言はねばならぬ。又人間は現在に於ける身體をそのまゝ向上發達せしむるのみならず、人間は先天的に不正なる姿勢の持主として出生することもある故に、之等の缺點を矯正し、以て其の體格の完成を得ねばならぬ。以上の理由によつて、この體操を主とする教授法は最も重要なものであるから、其の時間の配當にも、最も多くの時間を配當するの必要がある。故に余の時間配當に關する意見は次の通で

ある、一週四時間の體操時間なりとして。例を示すことにする。

- 第一日目 體操を主とする教授法
 - 第二日目 遊技を主とする教授法
 - 第三日目 體操を主とする教授法
 - 第四日目 競技を主とする教授法
- 若し一週三時間とする場合に於ては

- 第一週目
 - 第一日目 體操を主とするもの
 - 第二日目 遊技を主とするもの
 - 第三日目 體操を主とするもの
- 第二週目
 - 第一日目 競技を主とするもの
 - 第二日目 體操を主とするもの
 - 第三日目 遊技を主とするもの

二、體操を主とする教授法に於ける注意

徹底的に訓練的に實施すること
 従來の體操教授法は、日日同様のことを、反復することにより、興味なく快感少なし。故に教育者も被教育者も、之を継続的に努力することなく、漫然と一通りの教程の順を終へて、その目的を達したるか、の如く考へた觀なきではない。吾人の經驗も亦之と同様である、それ故に訓練的の價值、及體育的價值を發揚することは至つて少く、その爲めに體育科の存在を輕視する學校も時としてはある、かくの如き缺陷は、教師の研究と努力と人格の不備に基づくものである。

三、本能的教材を主とする教法上の注意

自由を根本とせよ。
 自由と云へども無制限なる無批判なる自由を標榜するものではない、眞の自由を求むるものである。體操を主とする教法は、その意志的訓練及身體の合理的修練なるにより、彼等の自由的活動はない、故に彼等の自由的活動なきため、従つて運動に關する興味の起らないことは繰り返して述べたが、其れに反して本教

授法の主なる教材は彼等の自由活動をなすに適してゐる。故に本時間は専ら運動に快味を興へることを主眼とし、而して體操を主とする教法に於ける緊張を調和せしむることが大切である。又本時間の主要の目的は、教師と生徒間の精神的融和をも目的とすることは、體育向上のため大なる價值ありと言はねばならぬ。

整理運動及主要教材の実施を忘るな。

本能的教材である遊技競技は理想的科學的教材と言ふことは出来ぬ、却て其の教材には、身體の悪姿勢を生せしめ、又身體の一局部のみの特別なる訓練なる教材もある。それ故その整理運動に多くの時間を要すべく、且亦、彼等の生活上、特に將來必要なが如き運動の合理的實施は特に注意して忘れてはならぬ。整理運動には十分なる時間をとり、一時間中に於て生じたる弊害を補助矯正して置くの必要を見る。例へば一時間のうち多く體を前屈するが如き運動を中心とせる場合は之を矯正し置くを要するなどである。又本教法は生徒の自由を主とするものなる故その整理運動に於て、規律的なる運動を若干行ひて其の精

神の弛緩をひきしめておくの必要がある。

第二編 本論 (二頁—三六八頁)

Faint vertical text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

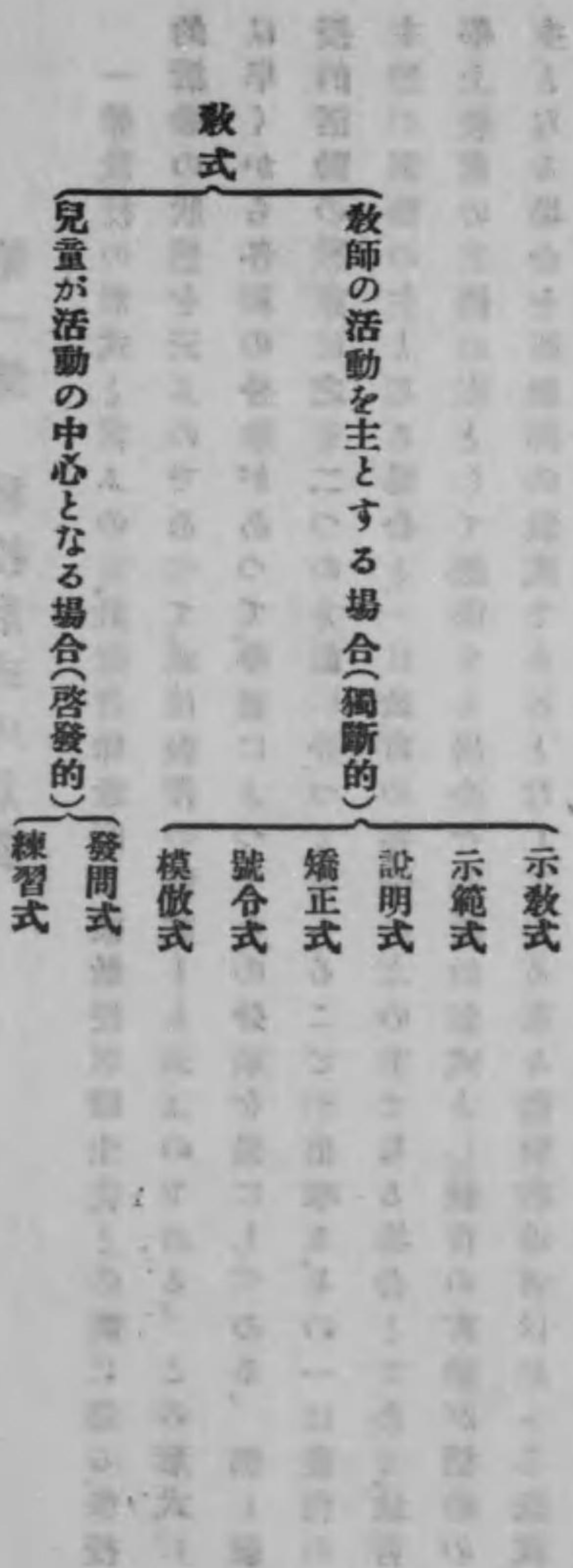
Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

後第一章 體育科教授法の形式

第一節 教授形式の意義

一體教授の形式と言ふのは、教授者即教師と被教授者即生徒との間に起る、教授的活動の状態を云ふのであつて、或は教授の教式とも云ふのである。この形式には早くから各種の分類があつて、學者によつてその分類を異にしてゐる。然し教授的活動の状態は之を二つの方面に分つて考へることが出来る、その一は教育の主體が活動の主となる場合と、一は教育の客體が之の主となる場合とである、教育學上教育の主體の主として活動する場合を獨斷的教式とし、教育の客體が活動の主となる場合を啓發的の教式であるとなしてゐる、吾々體育指導者はかゝる教式が體育指導上、如何なる場合に適用されるか、又如何に吾々はこの教式を活用するかについて考察しておくことが緊要だと思ふのである。今體育教授の形式として舉ぐべき示範教式、示教式、説明教式、矯正教式、模倣教式、號令教式等は教師が主と

なつて活動する場合で獨斷的敎式に屬し、練習敎式及發問的敎式等は兒童が活動の主となる啓發的敎式に屬するのである。今體育科教授中に於ける敎式を表示すれば次の通りである。



第二節 教授形式の説明

教授の形式の意義に於て形式の種類を述べ、體育科教授上に於ける形式にまで

及んだが、體育科教授上に於ける敎式を説明するに當つては、今少し根本的に説明せねばならぬから、他の學科に於けることも引用して説明することにする。

一、示敎式

教授に當つて實物、模型、繪畫を示し又は實驗を行つてなすものが示敎式と云ふのであつて、理科教授、地理教授等には此の敎式を用ふることが比較的多い。かく此の敎式は知的敎科に於ける教授の形式として用ひらるゝことが多いが、技能科である體育科の教授に於ても最も大切な敎式である。體育科の各運動は合理的科學的に實施すべきもので、又その理想は被教育者の自覺的活動であらねばならぬから、一通り知的の發達をなしたる被教育者には、體育科教授の或時間、或は雨天等を利用して、模型、繪畫等によつて運動に關する智識、身體に關する注意、運動の要領等を知らしむるが如きは最も重要なことだと思ふ。雨降れば生徒の自習に任せ、他になすところなき教師は、實にこの示敎式の觀念に乏しきものと批評するも可なるものである。教育は智育、德育、體育、美育と云ふ様に分類はしてあるが、之は教育の事實を研究する方便上よりの分類であつて、決して各獨立して存するも

のではない。例へば修身教授は徳育なると共に智育でもあり、又體育でもあり、又體育は身體の發育發達と云ふことを主とするが、又修身であり、又智育である。只その主とする任務が異なるのみで、他は總て有機的關係をもつてゐる。體育指導そのものが技術の練達のみとしたならば、それは體育の一部を遂行してゐることになつて、體育指導者は一の技術者として、一般的の悪評を受けることになることは當然である。それで體育教師は、一方には體育教師であると共に、又修身の一般智識、音樂の一般智識等を有して、體育を通した修身教授、體育を通した智育と言ふことに注意すべきことは最も大切な問題である。雨降つて教室の中では體育はやられぬとする教師があつたとすれば、それはいまだ消極的體育を知らぬものであらふ。又、體育上に於ける示範式、或は説明教式の觀念に乏しきものであらふ、大分横道に這入つたが、實際體育の向上は多方面に亘らねばならぬし、又その原因も多くあることと思ふが、現代體育教師は體育を通した智育、體育を通した徳育と言ふことに着眼してゐない、人よりも五寸多く跳べば、最早體育の全部を終つた様な顔をして得々としてゐるものが多い。つまり體育向上の一原因は、體育指導者の

實の向上にありと言ふのである。尙極端に論じたならば、雨天の場合教室に於ける體育教師の手腕の向上によつて、體育は一般的に向上するものだと言つても過言ではあるまい。つまり體育教授上示範式の如きは、この邊に充分の價值ある教式である。この教式は體育教授にあつて、體育の理論、運動の要領等を模型、繪畫によつて授けるものであつて、その活動は教師が主となるものであるから、獨斷的教式の中に含まれるものである。

二、示範式

示範式は模範を示して被教授者の模倣性を利用する教式である。その活用すべき範圍は非常に多い、例へば、圖書教授、書方教授、手工教授、唱歌教授等の場合の如きで、特に體育科の教授は示範式によらねば教授することは不可能であると言つてよい。この示範式に最も重要なものは教師の模範と言ふことである、次に模範といふことについて述べて見たい。

A、模範は完全なること

模範の完全と云ふことについては、二つの方面から觀察することが出来る、その

一は心理的の方面と、二つは外形的の方面とである。心理的に完全といふのは教師の熱誠なる精神の充實した模範であつて、児童そのものに活躍努力をおこさしめる刺戟を與えるものでなくてはならぬ。之には元より教師の模範そのものに、學理的の自信もあることは大切な問題であらふ。外形的の完全といふのは、教師の優秀なる技能である、而してその熟練なる動作は運動の要領を適確に表現し、児童は之を直観して、直ちに本運動の要領、及主眼點を會得するに充分なるものでなければならぬ。實際教授に於て時には教師の不完全なる模範が先入主となつて、其の矯正に骨が折れるといふことがあるのである。結極要領の完全なる表現、及正氣ある模範は、完全なる技術であつて又完全なる模範であらふ。而し模範についてはその模範が完全であるばかりでなく、又次の事項を注意しないと、その完全の模範を十分發揮することは出来ないものである。

B、模範を示す位置

その模範を示すには運動に依り、或は児童の状態より種々異なるものである。例へば児童の正面にてなす場合もあるし、背面よりなす場合もあり、直立のまゝな

す場合、休めの姿勢にてなす場合、自然的排列にてなす場合もある。炎天の下にてなす場合もあり、寒風吹き荒ぶグラウンドに於てなす場合もある。要は教材の性質、児童の状態、季節の如何によつて臨機應變にその位置を選定すべきものであるが、又次の様なことは模範を示す場合に見逃すべからざる着眼點であらねばならぬ。

● 観察せしむべき模範は、全級の生徒に明瞭に見ることの出来る位置にてなすこと。観察することが大切で、これに關して最も大切なことは配列と言ふことである。特に従來體操教授に於て、このことは指導者も考へて來たところのものであるが、器械使用とか競技の場合に於ける、又ダンス教授の場合等には、いまだ研究が不充分であることを感ずる。この配列と云ふことについては、充分の注意を要する問題であるが、之は排列に關する研究のところ、に於て述べる事として、其の他の注意事項を次に羅列することにする。

- 模範を示すには被教育者の發達に應じ分解的に之を示すこと。
- 模範を示すと同時に其の要領を説明し之を會得せしむること。
- 模範は被教育者の身心發達状態に適合すること。例へば低學年に於て未

だ智的發達幼稚なる場合は模範を示して、彼等の模倣を利用するが如く、高學年に於ける教授に於ては問答式を交へ、被教育者をして教示すべき要領を可成的發見せしむる様に指導することが大切である。

●總て要領を説明して同時に之を實演せしむべきこと。

●一度模範を示したることは多くの場合に之を應用せしむること。

三、説明式

講話式と云ふのは實物若しくは模範を示して教授する場合、又は實物、及模範に依つてなすこと不可能なる場合に、談話を以て教授をばおこなふ場合である。然してこの講話をなす場合に、事實その儘の講話と、教材の意義及用法注意等を説明する場合とがある、前者を述敘的、後者を講義的といふので、體育教授に於ける説明はこの講義的の教式の中に含まれるものであらふ。體育科教授上に於て高學年の體操教授及競技指導に於ては、最もこの教式は適用されるものである、今この教式に就て注意すべき點を列記する。

A 説明は被教育者の發達程度に應じ簡單にして理解し易いものでなければ

ならぬ、未だ彼等の理解し得ない様な言語を用ひてはならぬ。

B 指導者の説明は快活にして正氣あり、簡にして要を得てゐることが大切で、強ひて饒舌を弄することは禁物である。それで説明に際しては運動の目的、要領、注意事項及誤り易き點を簡單に理解せしむる位にて充分である。

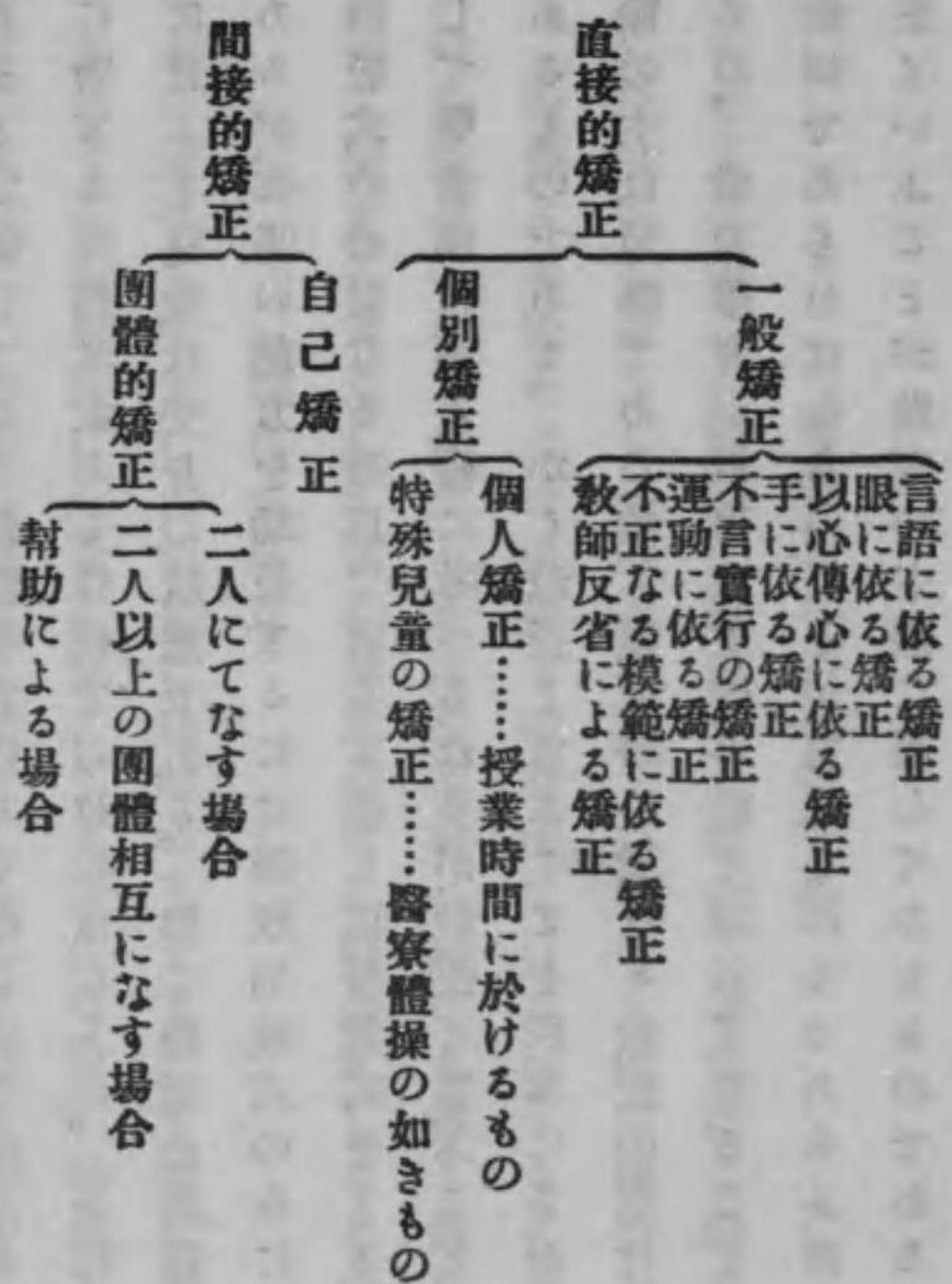
C 説明教式の適用 新教材の場合にはこの教式を用ふることが當然であるが、生徒が充分會得してゐることを新らしく繰り返すと云ふことは時間の浪費にすぎない。しかし競技練習の場合等に最早彼等が練習に倦厭を生じた場合、或は教室内に於ける體育教授等には多く適用さるべき教式である。

四、矯正式

教授といふことは、彼等に智識技能を授けると言ふことであるが、吾々は單に授けるそのものを以て教授とすることは出来ない。この教授といふことを考へて見ると、授けると言ふことの外に正しくすると言ふことも含まれることと思ふ。勿論授けると言ふことは、彼等の誤つてゐるところをも、正しく授けると云ふ様に授けるといふ意味を、廣くとつたならば問題はない。さて智的教授作用に於ては、

彼等に正確なる智識を授けると同時に、彼等の有する誤つた智識を正しくする方面も又大切なことである。技能科に於ては一の技能を授けると同時に方法及び型に於て、誤つた技能を正しくすると言ふことも重要なことである。この誤を正すと言ふことがなかつたならば、智的教授に於ては教授の能率を擧ぐることも難く、技能科に於ては技能の進歩及その技能の實際的效果を發揮することは出来ない。特に重要な點は誤まれる方法及び型を有する技能によつて、驚くべき悪結果を來すのは體操科である。欲陥ある運動實施によつて、如何に身體の悪結果を來すことであるかは明らかなことである。尙進んで人體と言ふものには先天的の悪い點もある。それ故體育科に於ける授けると言ふことに關して、正すと云ふことは、一つには技能の正と言ふこともあるが、又身體自身を正しくすると言ふこともある。體育科の教授に於けるこの二つの方面の正しくすると言ふことが、所謂矯正といふことである。即ち技能の矯正といふことは、運動實施の要領矯正直立姿勢の矯正の如きものであつて、身體自身の先天的缺陷の矯正は特殊兒童の取扱等である。この矯正に個別的矯正とか、一般的矯正と言ふ様に種々の分類があるが、

著者の之と信する分類を左に表記し、矯正に關する注意を項を逐ふて説明することにする。



右の表を説明するに當つて、先づ解決せねばならぬ問題は、直接及間接といふこと

である。教育といふことを比較的成熟者が未成熟者に對して行ふ有爲具案的影響であると定義してゐる教育學者のある様に、教授作用も之に則り、教育者が被教育者に對する有爲具案ある作用でなければならぬ。それ故教授活動について一般的に言ふと兒童は受身の状態である。即ち教師の獨斷的敎式を主とすべきものであるが、彼等の能力を助長するには、獨斷的敎式のみにては不充分である、これ啓發的敎式の必要なる所以であらふ、而し啓發敎式をとるにあつて、教授活動は主として兒童側にある様に考へられるが、教授と言ふことのおこる原動力は教師側にあるものである。かく教授と言ふことを根本にさか上つて考ふるときは、その活動の主は教師である、特に體育科に於ける教授の主たるものは教師であらねばならぬ。教育學者が教育の主體、客體と論じてゐることよりしても、教授活動の主が教師であらねばならぬことが肯定されるであらふ、尙進んで體操教授に於ける矯正といふことが教育の主體に屬してゐるものであるか、客體に屬してゐるものかと言ふことも明白なことである。かの兒童相互の矯正の如きは一見教師に屬せざる矯正の如く思考されるが、之とても教師の有する教授の範圍に屬するも

のである。茲に矯正の主體は教師であると言ふ理由が存立するであらふ。この矯正の主體が直接働く場合が直接的矯正で間接的に働く場合が間接的の矯正である。

A、一般矯正、及個別的矯正

直接的矯正の中に一般的に矯正する場合と、個別的に矯正する場合とがある。一般的に行はれる場合を一般的矯正といひ、個人的の場合を個別的矯正といふのである。尙個人的矯正は普通授業時間に行はれるものであるが、而し特殊兒童の特別時間取扱の如きは、少々普通授業中に於ける個人矯正とはその趣を異にするから、個人矯正と對立して個別矯正の中に包含せしめたのである。

B、間接的矯正

高學年に於ける兒童には個個に教師の手を下して矯正する必要をみとめぬ場合もある、かゝる場合各自覺的に矯正する場合は自己矯正と言ふ。團體的矯正といふのは二人以上の團體が相互に矯正し合ふ場合である。

C、一般矯正の手段

一般矯正といふのは團體教授に最も必要なもので、團體全員の共通的に陥つてゐる欠點を一般的に矯正するものである。次に述べるその矯正の方法は特別矯正又は間接的矯正とも關係深きものであるから、ここに詳細に亙つて説明することにする。

1、言語に依る矯正

言語を以て矯正する場合は、親切にして熱誠のこもつた言葉を用ゆることが大切で、決して粗暴野卑であつてはならぬ。この言語の矯正及手の矯正、不正なる模範に依る矯正等と共に重視されるべきものである。

2、眼に依る矯正

内心が快である時と、不快である時との身體的の表徴は異なるもので、特にそれが眼部に表現することが多い。不注意怠慢の兒童には公衆の前にて一々警告し訓戒するよりも、かゝる兒童に對しては教師はその態度を特に眞面目に注視し、彼にある威嚴ある暗示を與えることがある。特にリズムミカル中心教法にありては、快を中心とするものであるから、教師の訓戒によつて全體兒童の不快を惹起する様な

ことはつとめて避けなければならぬ。かゝる場合にはこの矯正法は最も生命あるものと言はねばならぬ。

3、以心傳心に依る矯正

教師がその正すべき點を正確なる模範を示しつゝ、其の動作によつて或るヒントを彼等に與える方法である。例へば臂が高すぎる程上つてゐる兒童の前にて、臂を水平に示す時は、兒童はこの教師の簡單なる動作によつて或る刺戟を得、自己の動作を矯正するものである。この矯正は極めて簡單であるから時々適用するがよい。

4、手に依る矯正

目にて示し、言語にて知らしめ、又動作にて矯正せんとするも、自己の缺點を自覺しない兒童がある。かやうな兒童は餘程運動に無頓着なものか、又は自己の動作を以て、教師の模範や注意に適合してゐるものと信じてゐるからである。この場合は直接教師の手を以て矯正せねばならぬが、その手は慈愛の手でなければならぬ。

4、不言實行の矯正

精神の沈鬱せる場合、活氣に乏しく惰氣を生じてゐる場合、又は放心の状態を見せる場合には、教師は言語に依り、又は手を下して一々矯正するよりも、元氣の充實した完全な模範を示して、精神的の指導をなすが最も大切なことで、特に中等學校の生徒には口を以ての指導よりも、はるかに不言實行の指導が大切であることを經驗するのである。

5、運動に依る矯正

不言實行の矯正にて述べた様に、精神の沈んだ場合、上肢運動を課し、放心なる場合、規律的運動を實施するが如きは、運動に依る矯正である。

6、不正の模範に依る矯正

兒童が陥つてゐる不正なる運動の模倣をなし、兒童をしてその不正の發見及矯正法を考察せしむるが如きは之である。

五、號令式

教授が主として號令にて遂行される場合が號令教式である、教練の如きは號令

教式の代表とも云ふべきものであらふ。然し號令については、體操中心教授の部に詳細注意してあるから、ここには之を省略する。

六、模倣式

教師が模範を示しつつ兒童をして之に真似しむる方法で、最も簡易輕便な方法である、又比較的この模倣教式は、彼等の精神力を要することが少ないから、新教材の分解教授や、幼學年の教授に適用されるものである。特に教材としてはダンス、表情童謡踊の教授の場合には、この教式が最も多く用ひられる。而しこの教式のみにては、彼等の發見發明、創作力等を刺戟することは出來ないから、この種の教材の教授に於ては、特に創作的教授をとらねばならないことは、リズムミカル中心教授の各論に於て述べることにする。

七、發問式

實際教授に當つて、兒童が活動の主である場合を啓發的教式とすれば、發問式は練習式と同様に啓發的教式中に含まるべきものである。教師は彼等の技術を自己のみにて指導するのみならず、或は彼等に他人の運動の缺陷及之が救済法を發

問し、彼等をして運動に對する眞剣なる態度を教養するといふことが大切で、延びては之が彼等を大切なる自覺的活動に導く所以となるものである。

八、練習式

練習と云ふことは事の成功の秘訣であり、技能的教授に於て一層其の感を深くするものである。凡そ運動に關する快感は最初より起さしめる教材もあるが、中には一定の練習を経たる後起るものもある。特に體操教授中に於ける器械使用の如きは、この練習といふことが大切なものである。各時間毎に用ゆる器械を變換し、或は運動の要領を變更するが如きは、被教育者に練習の餘地を與えず、最も拙劣なる方法と言はねばならぬ。この練習と言ふことについては、體操中心教授法の部に於て述べることにするが、その邊にも注意することが大切である。

第三節 體育科教授の形式の適用

體育科教授の形式と言ふのは右に述べた様に各種あるが、この分類は大體に付て決定したものであるから、一時間の教授中に多數の形式の現れ來るものである。

ことは又明らかである。この運用を適切ならしめるのが教授上の秘訣である。而しこの形式を適用するに就いて我々の着眼すべき點は、教授する教材の性質と兒童の状態とであらふ。例へば新教材の場合に於て、低學年に於ては模倣式を重要し、高學年には説明式を重要するが如きは、兒童の状態による教式の適用であつて、ダンスの場合は模倣式を重要し、競技中心教授に於ける既習教材に於ては、練習式を重要視するが如きは教材の性質に依る適用である。つまり教式は一單元を取扱ふ中、時々刻々と變換するものであるから、指導者はこの教材の性質と兒童の状態とを看破して、鋭敏な判断を以て教式を適用することに熟練せねばならぬ。後に述べるリズムミカル中心教法、競技中心教授法、何れの場合に於ても注意して之が運用を巧妙にせねばならぬ。反覆して云ふことであるが、この教式の適用と云ふことは一見無難作の様であるが、時に應じ機に際して、意識的に又無意識的に種々の教式を採用し、被教育者して倦厭に陥らしめず、各教材實施の目的を透徹せしめる事にあるので、一種の技術であり、教授者の人格と手練の結果に依るものであるから、各教式の特徴及び適用の場合を種々に分類して述べたけれども、それ等に

のみ依頼せず、諸子は臨機應變の態度にて、以上述べた各教式の最大効果を發揚せられむ事を希望して止まない。先づ體育科教授法の形式に就ては之れで終り、次に各教材中心教授法の各論に就いて述べることにする。

この第一編の概論は、各教材中心教授法の形式に就いて述べることにする。先づ體育科教授法の形式に就ては之れで終り、次に各教材中心教授法の各論に就いて述べることにする。この第一編の概論は、各教材中心教授法の形式に就いて述べることにする。先づ體育科教授法の形式に就ては之れで終り、次に各教材中心教授法の各論に就いて述べることにする。

後第二章 リズミカル中心教授法の各論

第一節 前言

著者は第一編に於て、體育教材の本質上より、又從來體操教授の缺陷を救済することを目的として、三つの中心主義教授法を提唱してその一般を述べた。現時地方の状況を見よ、實際教授は余の提唱する三中心教授法を實際に實行してゐる。本夏滋賀縣下に於ける講習會に於て、二人の先生の實地授業を參觀したが、一は余の言ふ體操中心教授法にして、一はダンス中心教授法に外ならぬ。而しその教法そのものに理論的根據の充分であるか否かといふことについてはいまだ疑はしい點がある。參觀したその實際教授もダンス中心教法の如きその教材は玉石混淆の有様であつた。さて余は第一編の概論を償ふため、一には熱心なる各地指導者のこの趣を有する教法を實施しつつあるものゝため、一の参考として、今少し詳細に亘つて記述することにする。第二編はこの意味に於て少しく詳細なる部分に及

び之に著者の過去三ヶ年に於ける體操學校奉職時に於ける經驗とを附記することにする。

第二節 リズミカル中心教授法の形式的段階

一、形式的段階に關する諸説

教授の階段的形式に關する研究は、幾多の學者に依つて發表せられてゐるのであるが、その説は區々であつても大差はない様に思はれる。或一定の教材を或る程度の兒童に教授するには、最も適當な順序が存在することは疑ふことの出來ない所であるが、簡様な思想は十七世紀頃に其の始まりを見ると云はれてゐるものである。然し之が多少學術的に考へられ、今日の様な教授の形式的段階として發達する様になつた、その初步期はチルレルからである。一體この教授の階段的形式的存在する理由を考察すると、或る教材をもつて最も多くの教育的効果を發揚することにありと思ふ、即ち各教材の最大的効果を發揮する手段と見ることにて充分と信するものである。

一體知的教材の教授にあつては、簡より繁へ、既知より未知に進むのが便利であり、又理論的である。例へば一の知的教材を教授するに當り、最初彼等の散漫せる注意力を集注することも必要であらふし、又彼等の該教材を收得するに最も大切な既有的觀念を喚起することも必要であらふ、之が知的教授に於ける豫備の段階を生ずる理由となるものである。又この豫備の段に於ける觀念、及彼等の學習に對する動機を利用して教授の段に於て、新しき教材の正確なる觀念を授くるのである。然しこの授與せられたる知識は、そのまゝにては活用の力なき知識であるから、ここに於て新知識と、既有的知識との連絡系統を作り、この系統ある知識を各種の場合に適用し、試課せしめ、そして新知識をして力あるものとして置く必要がある、之れ知的教授に於て、教授整理應用の段階を生ずる所以となるものである。體育科の教授の階段的形式も之と同じ意味を有するもので、該時間配當された教材の最高の體育的價值を發揚せんとする一の手段と見て差支ないと思ふ。簡より繁、易より難と言ふのは教授の原則であるが、この原則を適用して體育科教授の階段的形式の意義を全うせんとするには、即ち必然的に生理解剖、心理の根據に依

らなければならぬ。體育科教授の階段的形式に關しては、最早諸氏も萬々承知されてゐることであり、又第一編に於て述べたところであるから、茲には之を省略する。然して、第一編に於ては尙進んでリズミカル教材中心教授に於ける形式的段階について大略説明したのであるが、ここに於て尙詳細に記述して見やう。

二、準備運動

A、準備運動に對する觀察の二方面

從來の體操中心教授に於ては、只準備運動中に着眼すべき點は、生理解剖、心理の原則のみであるが、從來體操教授の準備運動に於て、着眼して來た以外に最も重要な點の存するのは、リズミカル中心教授、及競技中心教授法に於てである。今從來の體操教授の準備運動をして誘導運動としたならば、リズミカル教材中心教授法に於ては、それ以外の誘導を必要とするものである。前者を一般的誘導となし、後者を特殊的誘導と言ふのであるが、この一般的誘導に着眼すると共に、特殊的の誘導に着眼すると言ふことが、リズミカル中心教授法の準備運動に於ける觀察すべき二方面となるものである。今項を分つて説明する。

1、一般的誘導

總て物には着手と云ふ事がある、この着手には最初から激烈には行かない、心身を修練する體育科の教授に於ては、一層このことが緊要である。即ち急激の變化は破壊を意味し、無暴なる激變は失敗を來すから、失張リズミカル中心教授法に於ても、簡より繁へ、易より難と云ふ教授の根本原則を踏まねばならぬ。この意味に於て準備運動の目的を達するため、實施すべき運動は、教練、下肢、頭、上肢の運動であるが、之を生理的に考へて見ると、身體の局部に於ける鬱血を全身に平等に誘導することとなり、解剖的に考察せば、局部的より全身の運動に移るといふことになり、心理的に見れば、精神の集注をはかり、又氣分を爽快にして運動に従事せしむることとなり、換言すれば、身心をして運動そのものに順應せしむることとなるものである、このことは從來體操教授に於ても顧慮して來たところであつて、如何なる教法をとるときも必要欠くべからざるものである。リズミカル教材中心教授法、及競技中心教授法に於けるかくの如き着眼點を一般的誘導と云ふのである。

2、特殊の誘導

第一編教授法の根本原則の部に於て説明した通り、従來の體操教授の準備運動には、吾々の着眼すべき點が、この一般的誘導と言ふ一に止まつてゐたが、リズミカル教材中心教授法、及競技中心教授法中に於ては、準備運動中に一般誘導と言ふ他に、吾々が輕視すべからざる着眼點が存在するのである。何となれば従來の體操教授法等にありては、準備運動中に排列してある體操教材を順次に實施さへすれば、それが教授の根本原則に合致してゐたものである、是體操の有機的關係の存在する期であらふ。而しリズミカル教材中心教授法、及競技中心教授法に於ては、この一般的誘導の目的を達したとは言へ、いまだ充分と云ふことは出来ない。この一般的誘導と言ふこと、及本時配當された主要教材に對する特殊的誘導と言ふことが、リズミカル教材中心教授法、及競技中心教授法に於ける準備運動として、重要な觀察點であらねばならぬ。例へば本時間の主要教材が、「美しき天然」の表情遊戲であつたとしたならば、上肢、下肢、頭の如き體操教材そのまゝの實施によつて、準備運動の目的を達したといふことは出来ない。該時間に於て準備運動中に排列した體操教材を調律的に取扱ふ必要もあるだらうし、又美しき天然の教材に包含

する歩法の練習も必要であるであらふ。又體操教材を意志的に實施したる後、直ちに情的な主要教材を實施したとするならば、木に竹をついた様な教授となり、生理的、解剖的には合理的ならんも、心理的の缺陷を有するもので、換言すれば、準備運動と主運動との間に、心理的の連絡を失へる教法と評される事であらふ。其れ故リズミカル教材中心教授法の一般的誘導に用ふる教材も、審美的に取扱ふ必要がある。特に該教授法は感情を骨子とするものであるから、準備運動全體をして審美的感情的に指導して、主要教材の包含する情的方面に融合せしむる様注意することが肝要なことである。この特殊誘導と言ふものゝ目的を達するには、二つの方面があると思ふ。その一は準備運動中に採用する教材、及その取扱、その一は本時の主要教材に對する特殊の學習動機を樹立することであらふ。

B、特殊の誘導の目的遂行に關する注意

特殊の誘導の目的を遂行する手段として、一には教材の採用とその實施法、二には主要教材の性質に依る特殊なる學習動機の喚起と言ふことを述べた、今次にその一般を述べて見やう。

1. 環境と運動

教授法の根據に於て、環境の整理と體育と云ふことに就て述べたが、この環境といふものが人間生活に偉大なる影響を及すことは、環境を以て吾人の品性構成に必要な遺傳意志と對立せしめたこと等よりも推測することが出来る。彼を偉人たらしめたと言ふは環境の力である。教授の理想は彼等の自覺的活動であるが、之が第一歩は實に學習動機の樹立である。この環境が學習動機の樹立に大なる關係をもつてゐることは言を要しない。特にこの感情を根本とする教授に於て、環境の如何によつて學習動機の喚起に影響を來し、教授の効果を増減するものであるから、リズミカル教材中心教授に於ける準備運動に於ては、尙更全部がこの環境を顧慮して實施すべきである。然らざれば本教授の眞の目的は達せられぬであらふ。ここに言ふ環境とは彼等以外の客觀體を指すものにして、教師及服裝運動場等其他をも包含するものである。

イ、場所と本教授法

體操中心教授法の教調は、汗ある教調、努力的教調、規律的拘束的教調、而して徹底

的の教法でなくてはならぬ。即ち努力的と云ふことが體操中心教授法の主眼であり又生命である。反之リズミカル教材中心教授法の教調は、情を根本とするもので、各運動を美的に取扱ひ、又本教材が包含する思想感情に融合する教調でなくてはならぬ。努力的な體操中心教授法は炎天下に於ても實施することが出来るが、リズミカル中心教授は涼しくして清麗なる運動場にて實施することが、理想であつて合理的であり、又教授の目的を達し、且つ本教授法の體育上の使命を果す上から言つても、適合してゐると言はねばならぬ。それで喧噪なる運動場、風吹き塵埃の多き場所、凸凹の多い運動場はこの教授には不適切である。清潔なそして整頓された屋内體操場等は最も本教授の場所として要求されるべきものであらふ。

ロ、服裝

吾々がスパイクを穿き、競技用のパンツを付け、ユニホームを着して競技に對する態度と、普通の運動服を着し、普通の運動靴を用ひてゐる時との心理的狀態は全く異なるもので、この心理的狀態と言ふのが教授上最も重視するべきことである。例へば清美なるそして藝術的作品を陳列してある圖書教室ありとする時、之に兒

童が書洋紙一枚と鉛筆とを持つて這入るその瞬間、この環境より来る刺激は彼等の心理にあるアクティブの状態を生じ、彼等の手は自然に書用紙の上に働かんとするものである。このアクティブな状態に價値の觀念を含んだ時、始めて教授上重要な學習動機は成立するものであらふ。この學習の動機を喚起することが、教授上の最初の問題であると言ふことは、再三再四反覆したところであるが、智的教授に於てはともかくとして、體育科教授等に於てかゝることを念頭において、教授するものは至つて稀れである様に思はれる。それで服装問題の如きは只單に運動障害と言ふ様な方面のみより考へるばかりでなく、かゝる感情的なる方面からも觀察するの必要がある。特にリズミカル教材中心教授法は感情を基礎となすものであるから、かゝる微細な注意の缺如によつて、その目的に到達し難いことが多い。それで本教授に於ては日本在來の服装の如きものには到底充分の活動も出來ないし、又本教授の眞の目的を達成することも不可能のことである。その服装の具體案については卷末をかゝりて詳述することにする。

著者は又本教授法と服装との關係を他の方面よりながめて見たい、それは日本人

がこの肉體美を輕視した理由と言ふものは、思想上等の色々の原因も存することであるが、服装と關係した原因と言ふものは、その服装が日本在來のものはいかにも直線的に出來てゐる、それで肉體美の状態が如何に外觀に影響するかは無頓着なりしこと、一には常に自己の身體と言ふものを厚き服装にて覆ひ、肉體美の如何に崇高にして優美なるかを直覺せなかつた事も原因であらふ。かく服装の如何は心理的にも肉體的にも多大の關係を有するものであり、特にリズミカル教材は體育的價値を發揮すると共に、一面には人間の生活に實際的ではなくとも、人間の審美性を間接的に向上せしむる任務をも有するものであるから、日本在來の服装の如き直線的なものにては、到底充分な肉體そのものの美を表現することは出來ないであらふ、之著者がリズミカル中心教授に於て日本古來の服装を採用しない理由である。然して服装改良といふことは經濟上色々の關係を有するものであるから、一概に論定は出來ないが、少なくとも體育教授中に於ける服装位は用意することは當然だと信する。何となれば吾人がそのものの肉體を愛護すると言ふことは、各自が自己の身體に對する倫理的本務であるからである。

ハ、季節及天候との關係

天候季節がこの教授と密接な關係をもつてゐることは明らかなきことであらふ冬の寒い日『美しき天然』の表情遊戯を実施しても、その情的教材の價値を發揮することは出来まい、これ季節と教材との關係であるが、又吾々は天候に依つて本教授の目的を達することが出来ない場合もあるが、之は容易に想像されることだと思ふ。

2、準備運動中に於ける其他の注意

イ、歩法教授と準備運動

表情遊戯童謡遊戯の基本となるものはダンスであると言つてよい。ダンスによつて訓練せられた兒童の表情遊戯といふものと、この訓練不充分なる小供の表情遊戯との間には、姿勢の優美といふ點について、又動作の敏活といふ點について著しい差異點を發見するものである。この必要なるダンスの基礎的とでも言ふべきものは歩法である。この歩法に動作即ムーブメントを加へたものがダンスであるが、表情遊戯及童謡遊戯はこの動作及歩法に歌詞を加味したものにすぎない。

いのである。それでこの歩法と言ふことは特に彼等に練習せしむべきものゝ一である。このステップの觀念、及要領を彼等に徹底せしむる時は、教授の煩雜を救ひ、且つ教授上教師の徒勞を助けるものであるから、本教授に於て特に力をこめて教授するがよい。今リズムカル教材中心教授法の準備運動について考へて見ると、先づ第一に實施すべきものは下肢の運動であらふ。それは解剖、生理、心理の上より考へて合理的である。然しこの下肢の運動をして、本教授の教調に合致せしめんとするには、リズム的、察美的に指導するの必要がある。今體操の下肢運動に代用するにステップを以てし、音曲と調和せしめたならば同じ下肢の運動に依つて一般的誘導の目的も達し、又本教授の教調にも合し、且つ本時の主要教材に對する學習動機樹立にも至つて易々たることであることを信ずるものである。

ロ、唱歌教授と準備運動

表情遊戯及童謡遊戯には歌詞と云ふものがあるから、實際教授に當つてはこの歌詞の包含する思想感情を音曲に調和して、最も完全に肉體的の動作として表現せしむることに努力せねばならぬ、之が本教材の特色である。故にこの教授に最

初なすべきことは、歌詞の正確なる觀念の再現といふことである。この再現を充分にせねば好き感情も湧いて来ない。次に歌曲の音律である、この音律の不完全には動作の教授に際して困難な場合があることは誰れしも経験することであらふ。それでこの歌曲の音律と歌詞の完全なる表現をはかると言ふことは、かゝる教材を取扱ふ準備としては最も大切なことであるが、かく考ふる時、唱歌教授と言ふこと、準備運動との間に、不可分離的關係の存在することは至つて分り易い道理であらねばならぬ。故に準備運動の始めに、本時間の主要教材の唱歌を練習するといふことは當然なることで、又主要教材に對する學習態度を樹立することや、本時間の教調に合することになる。例へば本時間の主要教材が朧月といふ教材であつたならば、先づ教師の伴奏につけて歌はしめよ、必ず彼等の心情は柔らぎきたることは必然であるこの唱歌の練習後に於て、頭、上肢、及本教材の有する歩法等を練習して、初めて準備運動の目的は達成せられたことになるのである。かく唱歌教授を準備運動中に採用する場合には、その歌詞の内容の説明等によく國語教授修身教授等との理解を要することが多いから、その邊は十分連絡をとつて、教材

の有機的關係の生命を生かすがよい、之は體育を通した智育或は德育の一例である。

ハ、教師の考案と準備運動

著者の経験によれば、音曲、及歩法並に調律體操等を結合して、生理、解剖の原則に反することなく、且つ學習動機の樹立、及教調に合した合理的な準備運動を考案することの可能なることを知る。

ニ、準備運動中に於ける訓戒

リズミカル教材中心教授法に於て、準備運動中に於ける教師の暴言、又は荒々しき行爲は、本教授の効果の過半を損すると言ふことは如何なることを意味してゐるであらふか、後章に體育一教材の擧ぐべき効果を、心理的效果と生理解剖的效果の二つに分ち、尙心理的效果を訓育的效果と情的効果との二つに分類した、そしてリズミカル教材中心教授に於ての訓育的效果は、ある自由のある情的氣分の中に收むべきものであることを述べた。それで本教授に於ては余程注意しないと、この訓育的效果を破壊する様なことがある。これ體操中心教授法に於ける訓

育的効果發揚との上に大なる相違を生ずる所以である。さりさて本教授に於て體操中心教授の場合に於けるが如く、積極的にその効果をあげんとすれば本教授の主義に反することになる。何となれば本教授は體育の情的効果發揚が目的であり、且つそれが本教材の使命であるからである。今準備運動の實施中に、或る兒童が訓育に反したる行動を採つたとき、之を全兒の前にて激したる言を用ひ又は荒々しき行爲を以て訓戒せんか、彼等の心理にはある不快を生じ本人は勿論全兒は一時間不快を以て経過し、本教授の眞の効果を達成することは不可能なことで、之が教師の一喝が本時の効果を削減するといふ理由となるのである。かゝる情的教材實施に於ける訓戒に必要なものは、教式中に説明せる以心傳心の訓戒、無言の訓戒、不言實行の訓戒等である。この點より見て情的教材を主とする教授時間の整理の段に於ては、吾人は積極的訓練の幾分を課することの必要を認め、後章教授案の實際の部に於て之を力説してゐる次第である。

ホ、調律體操と準備運動

調律體操はリズム的に身體を訓練するものである。ここに舉踵半屈膝の運動

を、號令的呼唱的に實施する時の要領、及び感じは、同教材を音曲に調和して行ふ場合のそれと全々異なるものである。本教授の準備に上肢下肢の結合運動を、音曲的に實施したとすれば、如何なる點より論じても準備運動としての價値を失ふことはあるまい。然し吾々はかくの如く調律體操、歩法等を組合せて、一のリズム的な、そして審美的な一つの準備運動の一團を考案することの可能なることを前に述べたが、次にその具體的の例を示さんに、假に本時の主要教材が「美しき天然」であつたとせよ、著者は先づこの主要教材を考へ、而して教調を考慮して、準備運動を最も合理的に組織して見たい。先づ最初になすべきことは、本時間の教授に必要な拍子の觀念を授けんため、唱歌の練習を一二回行つて見やう。然る時は彼等は本時の教材が三拍子と云ふことを感ずると共に、心理的には一の快情を喚起するであらふ。その後この三拍子なることを記憶せよと注意し、三拍子に關係あるワルツステップを歌ひながらにして練習せしめる。又その後上肢下肢の連合運動を音曲に合わせて實施して見る。然るときは本時の主要教材に對する一般誘導及特殊的誘導は完成せられ、且つ教授法の根本原則にも何等違反あることはある

まい。以上は極簡單なる一例をあげたに過ぎないが、かゝる考案のもとに、合理的準備運動と組織立てるには、余程教師の研究を要するものであるから、よく注意して経験して見るがよい。而してこの組立は主要教材の異なる事によつて、時々異なる組立を要するものであることを注意しておく。

へ、跳躍的の教材と準備運動

一教程の準備的教材を完全に實施しやうとしたならば、先づ生理上靜止時に於て、身體の局部的に鬱積する血液を一般的に誘導し、解剖的には局部的より全身的に及び、心理的には運動に對して精神の集注をはかることが大切である。之準備運動中に於ける根本原則である。然るにこの準備運動中に跳躍的の教材を採用するならば、それは全身の運動にして比較的急激なるものであるから、余程簡單なるものでないと、この根本原則に違反することになる。故に著者は本教授に於ては跳躍的の教材は採用せないを可とする主義をとつてゐる。それで次に述べる既習教材の實施等の場合にあつて、その教材が跳躍的の部分を多く含んでゐるとすれば、その跳躍的の部分に他の歩法を代用すれば可である。例へばスキップに代用

するに急迫歩を以てし、ホップに代用するに摺歩を以てするが様なことである。

ト、既習教材を準備運動とする場合

教授者は準備運動中に既習教材(リズム的な)を課することもある。而してこの既習教材を準備運動中に採用するについては、余程考慮を要すべき問題が存在することを忘れてはならぬ。之に關して第一に注意すべきことは、彼等を速に疲勞に陥らしめない様その回数等を斟酌することであらふ。何となればこのリズム的な教材は、自働的の運動であつて、身體動作と音曲の合致、及感情の高潮に従つて、思はず過激となり、いまだ主運動に到達しない以前に最早疲勞を覺えしむるに至るものである。それで準備運動に既習教材を採用する場合には、余程主運動と連絡あるものか、若くは極簡單なる教材の他は採用しない方がよい。之よりも歩法の練習動作の矯正拍子の觀念の獲得、又は調律體操等を適用して漸進的に主運動に移行するがよい。今本教授に於て既習教材を用ゆることに關して著者は次の如き意見を持つてゐる。つまり主運動の實施は、練習教式の場合もあるが、之は至つて少なく新教材及び練習不足の教材を取扱ふ場合が多い、それで主運動に於ては

説明教式、示範教式等各種の教式の行はれるもので、或は兒童の欠陥を矯正することも必要であるだらうし、又教師の示範及説明も必要であらふ、結極之を兒童より言はしむれば自由におどることが出来ないと言はねばならぬ。彼等は余程練習した後でないと言曲に調和して快情を以て動作することは困難なものである。それで教授に於て活動に關する快感を惹起するまでには行かないものであらふ、特に新教材の教授に於ては最もかゝる感を深うするものである。而して第一編にも言つた様に、教授時間彼等に活動に關する快感を味はしめておくことは、最も必要なことである。それで主要教材が練習不足なる場合、或は新教材なる場合等には、その教授の後、比較的彼等の自由に遂行することの出来る既習教材の實施は、最も意義の存することであると言はねばならぬ。そして一には彼等に無上の快感と興味を興えておくがよいと思ふ。

チ、體操中心教授法に於ける主運動中の重要な

體操教材をリズミカル教材中心教授法の準備

運動に採用する理由

以上各項に分類した準備運動の注意事項のみ顧慮するのみを以て、リズミカル教材中心教授法の準備終りたりと考へる事は出来ない。以上に述べた準備運動は頭、下肢、上肢の體操教材を察美的情的に取扱ひ、本時の教調に合致せしめよと言ふ位にして、本教授の準備としてはいまだ充分なるものと云ひ難いのである。何となれば右に述べた準備運動のみにては、解剖的の根據に反するものにして、又體育上最も重要な點を輕卒に取扱つてゐる評を免れることは出来まい、今その理由を説明する。右に述べた準備運動は、重に上肢、下肢の輕度の運動にして、いまだ全身を訓練したるものと言ふことは出来ない。前に準備運動中、既習教材を採用することについて注意したが、それも只單に上肢、下肢の輕度の運動であるから、いまだ全身的の筋肉を訓練したと言ふ譯には行かない。然るに本時の主要教材は、比較的困難なる全身の運動にして、又時間的に見ても、本時の大半は之に費するものであるから、解剖的にも又生理的にも、十分の準備を必要とするものである。本時の主要教材はかく困難なる全身の運動例へばシヨツテイシであるから、前述の如き準備のみにては、解剖的に見て一大の缺陷を有することを發見することを得

る。即ち右の準備に加ふるに胸背側方腹の運動を実施して、始めて全身の筋肉は訓練をされたものと言つてよからふ。是れ本教授の準備運動中に、体操中心教授の主運動中の重要な体操教材を採用せねばならぬと言ふ一の理由となることが極めて明らかに肯定されることであらふ。又右述べた準備運動のみにては、體育上の重要な點を忘却してゐると言ふことは、体操が體育教材中の最高權威であつて、之が適用は常に重視されるべきものであると言ふことより推測される。本時はリズム的教材を主とする教法である故、勿論この教材に着眼し、注意して教授せねばならぬが、又他方面をも考へる必要がある。著者が本書刊行の動機も體育教材の最高權威である体操を如何にして生かすかと云ふ考へからである。而して従來の体操教授法に諸種の缺陷の存することを前提として、リズムミカル教材中心教授法等の必要を提唱したと言ふことは、幾度も反覆したが、之には讀者の大なる注意を要求しておく次第である。故に著者は言ふ、科學的な合理的な体操教材を無視したリズムミカル教材中心教授法は吾人のとらざるところである。如何に本時がリズム的教材を主とする教法であるとは言へ、人間の一生涯よりながめ

且つ亦彼等の日常生活等より考へて、身體の最も大切なる部分を合理的意識的に訓練しなければならぬと云ふことは至當な問題で、之は一日一時たりとも忽にしてはならぬものである。試みに兒童の家庭生活及學校生活を見よ、彼等はその兩生活に於て如何に身體の主要部である脊柱、胸廓呼吸器循環器等に悪い影響をうけつつあるかを、それらの事は具體的に説明する迄もない事である。斯くの如き點より見ても、前項に於て述べた丈で準備終りたりとて、直ちにリズム的教材の實施をなすが如きは、實に體育の重要部分を忘却せるものと言はねばならぬ。それで準備運動中下肢、頭、上肢の運動の外に重視すべき体操教材を實施すると言ふことは、最も當を得てゐる所置と信するものである。この準備運動中重要な体操教材を實施するといふことは、延いてリズムミカル教材中心教授法の生命を一層生かす所以となることは、後章に述べてあるから、その理由はそこに明らかにて欲しい。

リ、重要な体操教材實施上の注意

●實施の順序

本時体操教材の實施は、従來体操教授の準備教材の次に行ふべきものであ

る、即ち下肢、頭、上肢の次に行ふことが適當であらふ。

●教材の種類

平均運動、懸垂運動、跳躍運動を省いた以外の、従來體操教授の主運動にて可なるものである、之等の理由は次項の意味にて了解することが出来ると思ふ。

●本時體操教材は複雑なるものを課するな

本教授の準備運動中に採用する體操教材は極簡單なものでなくてはならぬ、それで器械を使用する様な複雑なものとか、排列を變化せねばならぬものとかは成るべく忌避して、短時間にそして簡単に實施される様なものが多い。如何に體操教材が大切なものとは言へ、本教授の目的はリズム的な教材を主としてなさねばならぬ。何となれば本教授法を採用した理由が體育全般から眺めて體操そのものに對する價值及び興味を間接的に一層増加せんと主義に出たものであるからである。此の點は第一編に於ても述べたところであるが、最も注意せねばならぬところだと思ふ、それでこ

の體操教材實施に於ては、體操中心教授の場合に於けるが如く、主運動として實施するのではなく、やはり本教授の準備的の考へにて、即ち副材として實施する心掛であればよいのである。

準備運動中重要部分の體操教材實施に依つて、本教授の教調を破壊せざるや

著者がかく三大教材中心の教授法を提供した所以のものは、體育各教材の本質に依つてその教調を異にするからである。體操中心教授法に於ける準備運動に於ては、之に排列した體操教材そのものを意識的合理的に實施さへすれば、その目的は達せられたことになるが、リズムカル教材中心教授法に於ける準備運動に於ては、體操中心教授法に採用した教材そのまゝの實施にては、其の目的を達することは不可能なものである。即ち準備運動中に選擇した體操教材をも、情的に察美的に指導すべきものにて、本時の主要教材の包含する思想感情を、充分に發揮せしむるに助けとなる様にせねばならぬ。言はゞ準備運動は本時の主要教材である情的教材に對して、總ての點が連絡を保持せねばならぬと言ふことで、例へば主要教材の

歩法と準備に於ける下肢運動との連絡の如き、又主要教材の包含する思想感情との連絡の如きも大切なことである。体操中心教授法の準備運動中の体操教材をそのまゝ実施したる後、直ちに本教授の主要教材を実施するやうなことは實に木に竹をついた様な教法で、到底主運動と準備運動との間に心理的の連絡の如きは全々無視されたものと言はねばならぬ。而し準備運動中の下肢、上肢の如きは審美的に教授することが出来るが重要部分の体操教材はその性質上、及要求上審美的感情的に指導することは絶対に不可能なものである。それで、頭、下肢、上肢と言ふ様に情的に指導して來た次に、脊、胸、側方筋の訓練等の如き重要な体操教材を排列したならば、切角に今まで情的に指導して來た、所謂教調を破壊せぬかと言ふ疑問を生ずるかも知れないが、而し之は無用の心配である。本教授は情的効果の發揚を目的とするものであるが、其準備運動より終りの運動まで、情的に指導すると言ふことは却つて興味を減削するものである。硬柔、強弱、緊張、弛のところに興味は存するものであるからである。かく考ふる時は、上肢、下肢等を情的に指導した後、に簡單なる意志的な合理的な体操教材を実施すると言ふことは、最も有意義な

ことで、一層本教授の情的効果をあぐるに力あるものである。所謂この重要な体操教材を実施するそのものは本時教調の調節となるものである。然るに破壊せぬとしないはこの重要部分の体操教材を如何に取扱ふかと言ふ、指導者の研究と経験とが大に關係あるものであるから、よろしく指導者はこのことに關して経験して見るがよい。

三、本教授の主運動

A、主要教材となるべきもの

第一編に於てリズミカル教材を數種に分類したが、ここに言ふリズミカル教材とは、ダンス、表情遊戯、童謡遊戯、律動遊戯を指すものである。然るにこの四つのもれかであれば、その教授に必ず本教授法をとらねばならぬと言ふ譯のものでもない、如何なるものをリズミカル教材中心教授法にて取扱ふか、又、その以外のもの、教授はいかにするかと言ふことについて意見を述べて見たい。

1、ダンス

複雑なもの……………リズミカル教材中心教法
新教材……………リズミカル教材中心教法
既習教材……………リズミカル教材中心教法

2、童謡遊戯

新教材……………リズミカル教材中心教法
既習教材……………ダンスの既習教材と同じ

3、表情遊戯

簡単なるもの 新教材(ダンスの場合同)
既習教材(右同)
複雑なるもの……………(ダンスと同)

4、律動遊戯

複雑なるもの(前同)
簡単なるもの 新教材(同前)
既習教材(同前)

B、主運動教授上の注意

- 一、本時の主要教材が新教材なる場合
- イ、歌曲歌詞

新教材と言ふ觀念に吾々は二つの方面を考へて居らねばならぬ。その一は動作のみの新教材であつて、歌曲及歌詞は既に彼等の知つてゐる場合、一は共に新教材である場合である。之によつてその取扱を異にせねばならぬ。歌曲及歌詞が既習教材なる場合は、拍子の觀念を知らせたり、又既有的の觀念と感情を再現せしむることは容易であるが、之れとても準備運動に於てか、或は重要な體操教材實施後一二次の練習をなすことが大切である。最も難問題は歌曲、歌詞共に未知の場合の時であるが、之は唱歌教授と關係するより他にあるまい。この未知の歌曲及歌詞は體育教授の準備運動中位にては、徹底せしむることは出来ないから、それどころものは、唱歌教授に於て正式に之が教授を行ひ、體操教授の準備運動中等に於ては、之が復習位にて充分である。若し體操教授中にて歌曲、歌詞の新なる教授をなすとするれば、本教授の主要教材に移つた場合、教師の口調に合して歌はしめ、之を動作と關係せしめ、彼等の視覚、聽覺、筋肉覺等に訴へて覚えしむる方法が便利である。

新教材と分解教授と言ふことは密接不離の關係がある。ダンス、表情遊戯の教

授は模倣を利用した示範教式であるがこの示範につれてぐんぐんと進むべきものではない、一段一段一節一節と矯正し反覆せしめて進むべきものである。そうしないと彼等の模倣にのみ放任するときは、完全な審美性は發揮せられぬ。又その順序のみならず、歩法の困難なる場合、動作の複雑なる場合等によく分解的に教授して之をよく會得せしむることにつとめねばならぬ。

ハ、彼等の創作力を活用せよ

注入主義の教授は、知的教授にあまりに歓迎の出来ぬものであるやうに、體育上全然模倣教授をとることは賛成は出来ない。それで指導者は時々歌曲歌詞によつて、彼等をして創作せしむるがよい、教材は總て兒童のものでなくてはならぬ、時にすると大人のやつて見て面白いものを童謡といふ様に得々としてゐるものもある。之は最も非教育的なものにして、教授の重要な啓發的方面を忘却してゐることになる。彼等の創作力を利用する時始めて少くとも兒童に接近した教材を得るものなることを注意しておく。

ニ、順序の指導

表情遊戯、童謡遊戯に於ては、歌詞によつて運動の順序は明らかであるが、ダンス、律動遊戯に於てはこの順序の記憶に大なる困難を感じるものである。この順序を記憶せしむるには、反覆練習と云ふことも大切であるが、又教師の考慮も必要である。之に關して著者は次の如き經驗をもつてゐる。ダンスの如きものゝ順序を記憶せしむるにはステップを中心にした方がよい。第一節には第一節と代るべき歩法がある。第一節はスキップ、第二節はワルツステップと言ふ様に指導すると、直ちにそのダンスの如何なる具合に考案されてゐるかが直ちに明瞭となり、その順序の記憶も速かなものである。特に注意しておくのは、一動作終りて次の動作、或は歩法を教へんとするときは、第一番の終りの手足の姿勢を變化しない様に注意しておくことが、教授上至つて便利なものであるが、之は直ちに了解することが出来るであらふ。

ホ、歩法の教授

ダンス、表情遊戯の基礎的のものはステップである。それでこのステップに關する觀念を注入することはこの教授に於て最も大切なものである。それで歩法

の名稱等は記憶せしむる程度に教授するがよい、そうしないと本教授法に於て無駄な勞力を要することになるものである。歩法のみならず、本教材教授上必要なテクニカル等も、又同じ心掛が必要で、例へば内圓生、外圓生、左生、右生、内側の足、外足の足、圓の左、及右廻り等の如き之である。

へ、彼等を想像界の人たらしむること。

本教授の目的は、本教授時間の主要教材の實施によりあげられる生理的解剖的の効果のみならず、その重要な點は、情的効果の發揚にあるのであるから、この主要教材實施に於ては、遺憾なく彼等の感情を満足せしめ、且亦之を高潮に達せしめなければならぬ。之に吾々が最も注意しなければならぬことは、彼等を想像界の人たらしむると言ふことであらふ。教師は歌詞の包含する思想感情の再現に努力し、彼等をして歌詞の包含する實況を想像せしむることが大切である。即ち彼等をして、ある情的雰囲気のうち、に感興を起さしめる事である。そうでないと彼等の感情の眞の陶冶と言ふことは至つて困難なものであらふ。

2、主要教材が既習の教材なる場合

既習教材の適用に關しては、既に述べたところであるが、その練習に當つては、又吾人の注意を要する點があるそれは改作と言ふことである。この改作と言ふことは、彼等の創作心を最もよく刺戟するもので、又改作そのものについて多大の愉快を感ずるものである。

四、終りの運動

A、終りの運動に關する着眼點

終りの運動について、教授者の着眼すべき點が二方面あると思ふ。その一は一般整理と言ふことと、特殊の整理である。一般的整理と言ふのは、體操中心教授法の整理と同意義であるが、特殊の整理と言ふのは、主要教材實施の結果より見たる整理である。之の整理は心理的方面と解剖的の方面と教材の把持と言ふ方面より觀察せねばならぬ。一時間の過半を自由の中に活動せしめたから、稍もするとそのまゝ放任する時は、訓育的效果を破壊することになる、それで整理の段に於て少々積極的の訓練を行つて、彼等の心を引きしめておく必要もあるし、主要教材實施によりて陥つた身體姿勢の悪い點は、之を矯正しておくことも必要である。

特に主要教材を把持せしむると言ふ點よりして、その主要部を練習することも又必要なことである。之が終りの運動に關して、一般整理と言ふ方面の他に特殊的整理の存在する理由である。而していかなる順にこの特殊的整理を行ふが適當してゐるかと言ふことは、次章にかゝぐる教案の實際案にて熟知することが出来ると思ふ、然るにいかに心理的に積極的に訓練を加へおくとは言へ、彼等の感情を損する様なことは避けなければならぬ、何となれば本教授の目的が感情の陶冶にあり、情的効果を發揮することを主眼とするからである。

第三節 リズミカル教授中心教法に關する

其他の注意

一、易より難に及べ

易より難、簡より繁、既知より未知へと言ふことは教授法の要點である、表情遊戯ダンス等に於ては特に之に則ることが必要である。而して先づ教材の難易を決定することが先決問題であるが、今著者は次の事項に着眼したならば大體の見當

をつくることが出来るものと思ふ。

歩法の難易。

手脚の運動の難易。

手脚連合運動の難易。

該教材の包含する思想感情の程度。

音曲の調子。

二、被教育者の状態を顧慮せよ。

總て教育的動作は、教育の客體の精神及身體の發達状態に適應せねばならぬ、この状態を知悉して之に適應する教材を選択し、配列し、時に望み機に應じ、熟練とそして注意周到なる教法あつて、其の結果を良好ならしむることが出来るもので、教育の根本的事實を忘却せる教育的動作は眞に無價値なものと云つてよい。特に表情遊戯の如きは體育的直接の効果のみならず、その本質は感情を骨子とする即情的効果の發揚にあるもので、體操競技の如く單なる意志的筋肉運動に止まらない、その肉體的の動作は内界に生じた感情と融合し、彼等をして或は想像界の人た

らしめ、依つて彼等に藝術的の萌芽を啓培し、之等の総合的な結果は、彼等の思想感情を純潔高尚温雅ならしめ、且つ又彼等の生活を美化する等の重大の価値を有するもので、體育教材中最も心理的の意義を有し、之等の教法に於て心理的に立脚せざれば、到底體育教材としての存在を認めることは出来ないものとまで言つてよい。即ちその適用如何に依つて、却つて體育的価値を没却するものとなるものである。ダンスは女子専用のものなりとし、月経時に於ける女子に多くの跳躍的教材を採用し、又思考作用不充分にして、その觀念界も豊富でない兒童に、順序複雑にして長々しき教材を課するが様なことは、實に遊戲の爲の遊戲にして、體育的価値を没却せる、即ち教育の根本的事實を脱却した輕卒なる一の行爲と言はねばならぬ。故に教育者は被教育者の身心状態を考察し、兒童の状態を明らかにし、自信あり然かも確固たる教育的見識を以て望まねばならぬ。所謂ルソーが「汝先づ汝の取扱ふ彼等を知れ、汝は確かに彼等を知らざるものなり」と、エミールの書頭に題したる言は吾人の最も味ふべき事であると思ふ。

三、音樂及動作感情の融合

音樂、感情、動作の融合と言ふことは、このリズムミカル運動教授上の主要條件である。元來ダンス表情遊戲は内界に存在する情緒の表現である、此の情緒をして最も純に最も汚れ氣のないものとして表現せしめるところに感情のカルチュアは可能である。この感情の表現にあづかつて力あるものは音樂である、故にこの音樂と動作及感情はリズムミカル教材の主要性と言つてよからう。内界にある感情が自然的に肉體的動作として表現し、之が妙なる音曲と融合するとき始めて、リズムミカル教材の眞價を發揮したことになるのである。例へば「美しき天然」の教授法に於て、「夏の日、緑垂る木陰に腰をおろし、高く數十丈の高崖より、巖々たる巖角に碎けて落ちる瀧を眺める、其の堂々たる音は宇宙に響き、大きくうねつた律となつて流れ、其の律は青々と漲る瀧壺の波の様に、空に囀る鳥の聲は、此の微妙なリズムに調和する」この状態におかれた吾々の内界には、ある靈的な壯麗な感情は湧き出るものである。その瞬間我は我を忘れて、この雄大なるリズムの中に巻込まれ、我々の肉體はそのリズムのまにまに動くのである。この動作こそ眞の感情の表現として最も純にして最も崇高なものではあるまいか、此の感情の教養と

云ふことが該教材の根本的特色である。又本教授法の主運動に述べた彼等を想像界の人たらしめよと言つたこともここにて了解することが出来ると思ふ。それでこのリズム的な教材の実施に於ては、曲の如何なるものやを探究し、更に歌詞の内容を探り、之によつて起る純な感情を肉體的の動作として表現せしむることが肝要である。

四、教材の人格化

教材は總て人格化することが大切であるけれども、本教材に於て最も其の感を深くするものである。教師は先づ歌曲の内容を味ひ、之に調和する動作を研究し、或は該教材を地方化し、兒童化し、且亦いかなる體育的使命、又は教育的價値の存するかについて自信を得、以て本教材を自己の所有となして彼等に傳授せねばならぬ。即ち該教材そのものを人格化することの大切なるを思はねばならぬ、この教材にして若しも人格化されない時は却つて兒童訓育を破壊し、尙進んで體育教師の人格問題となることを經驗するものである。

五、リズムミカル教材の指導と呼唱

呼唱と言ふものが、現今教授上に於て教師がその主體であることは、體操中心法の各論に於て述べてあるが、特に本教材の教授に於ける呼唱は、音曲を以て代用さるべきものである。而し音曲を始めから使用することは不可能であるから、初步教授の場合にはやはり教師の呼唱を必要とするものである、けれどもこの呼唱が各場合に於ていさゝかその趣を異にするものであるから、重に如何なる場合に如何なる呼唱が適用されるやと言ふことに關して、著者の經驗を述べることにする。

A、數字的呼唱の適用

- 1、一二三四五六七八之は各場合に適用され、又運動の調子と合致し易く、又呼数を彼等に明瞭に意識せしむることが出来る。

- 2、一二三四五六七八

- 二二三四五六七八

- 三二三四五六七八

四二三四五六七八

この呼唱の多くは第一節より第六節と言ふ具合に連続的に實施する場合に用ゆるものにして、各節の移りを明瞭ならしむるものである。(但呼數八呼間の場合)

3、一と二三と四五と六七と八

音曲の拍數と動作の數が一致せぬ場合に適用するがよい、例へばチエンヂステツプの音曲は二拍子に動作は三つとなる。又二呼間に拍手三回なすとか二呼間に足踏三回なす場合の如き之である。

4、拍手を用ゆる場合

ホツプ四呼間の次にチエンヂステツプ四呼間が第一節となつてゐる場合等に於て、ホツプに一二三四を用ひ、次に拍手四呼間に六回を行ふ様なもので、之は動作と動作との區別を正確にすることが出来る。

B、音曲を用ゆる場合

之は一通り練習の出来上りたる時始めて使用するものであつて、彼等が第一節を充分吞込んだ場合音曲につけて行はしむるがよい。分解教授と言へ末だ動作

の記憶不十分なる場合は使用してはよくない。之に代用さるべきものは教師の音曲的の發音であるが、之には各種ある。

(イ) 音譜のみを發音する場合。

(ロ) 音譜を簡單なる語にて現す場合。(愉快のときタンタツタタタと發音するが如し)

(ハ) 音曲の中に數字を挿入する場合。

(ニ) 音曲と歌詞とを用ゆる場合。(重謠踊、表情遊戲の場合)

4、各節中に於ける呼唱の使ひ分

このことは本教授に於て最も力を要するものであつて、一節中に於ても追歩の場合とホツプの場合によつて呼唱の使ひ分を異にせねばならぬし、又動作の硬柔及緩急によつても、呼唱は異なるものであるが、之は一に教師の經驗と練習によつて上達するものである。

F、小學校適用のダンス教材は可成的簡にして快なるものを選択せよ。

運動會用のダンスとして一ヶ月も練習して居る學校も見受ける、かゝる教材は實際の體育教授時間には役に立たぬ、特に小學校適用のダンスは最も簡單にしてよく曲と調和する教材を採用せねばならぬ。實際ダンスを研究して見ると女學校用位の教材は澤山あるが低學年用のものは至つて少ない、然しあまり簡單なものをやると誰れしもやれ簡單だとか、あまりに平凡だとか批評をするが、實に彼等は教育者であり乍ら教育の客體を忘れてゐる、よく地方の講習等に切角小學校用の教材を選択し、又創作して行つてもつまらぬとか簡單だとか評される。一體小供と言ふものがそんなに複雑なダンスをやることが出来るものか、この邊のことについては讀者の最も熟考を仰ぎ度い次第である、それで小學校用のダンスについては先づ曲が愉快であり、そして動作は簡なるものと言ふことに着眼せねばならぬ。

六、動作の美と眼の關係

ダンスの初歩者の動作は、大抵手足のみの動作であつて、軀幹の如きは少しも手足の動作に調和してゐない、優美性と言ふものは手足の動作と體の動き具合の調

和したところに存する。この缺點の矯正にいま少し體を動かせとかいま少し體を左に傾けよと言ふ様なことには駄目である、それより動作と着眼との連絡を知らしめるがよい、着眼を正しく指導すると身體は自然的に手足の動作に調和し、全身の優美性を發揮する所以となるものである。

七、動作の硬柔についての指導

變化と統一なきところに興味は存在しない。それでダンス及其他のリズミカル教材の一教材中には、必ず軟動作と硬動作とが交互に排列されてゐる場合が多い。硬動作は直線的であるし、軟動作は曲線的である。又その速度に於ても異なる、それでその指導に於てもこの觀念を授けて實施せしめねばならぬ。

八、樂器の使用に就て

律動遊戲ダンスの如く快活に實施すべきものには快活なる音を發するピアノの様な樂器を使用することは明らかであるが、童謡遊戲、表情遊戲の中には餘程靜的な教材もある、この場合は靜的な音を發する樂器を使用するがよい。

九、本教授法と教師の修養